

1 先人の伝記



	資料名	主 題	作成者（所属校）
(1)	「わたしが行かねば」	強い意志	内田真千代(府中市立上下南小学校)
(2)	「希望の花」	希望をもって	木村 智子(呉市立三坂地小学校)
(3)	「和田吉左衛門物語 —新たな地を求めて—」	郷土愛	奥田 健(大竹市立小方小学校)
(4)	「武将茶人—上田宗箇—」	個性の伸長	津秋 智子(廿日市市立宮園小学校)
(5)	「一筋の光を求めて」	故郷の宝	福田ゆりえ(坂町立横浜小学校)
(6)	「夢とロマンを追い求めて —彫刻家 園鋳勝三—」	理想の実現	松永美代子(尾道市立日比崎中学校)

(※資料「私が行かねば」作成者:府中市立国府小学校 教諭 花田三恵)



教材活用例(1) 「わたしが行かねば」

〔小学校中学年 主題：強い意志 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—藤野昌言—について〉

藤野昌言は、府中市の医師である。明治 12 (1879) 年に全国的に流行したコレラの治療に自身の危険も顧みず邁進し、身を捧げた。

地域の人々は、その死を悼み、現在、古香堂と呼ばれている祀堂を建て、感謝の意を表した。現在も、命日には、遺徳を偲ぶ昌言祭が行われている。



天保 3年 (1832年)	現在の府中市に生まれる。
嘉永 4年 (1851年)	父の後を継いで医者になる。19歳
明治12年 (1879年)	全国的にコレラが流行する。 48歳で亡くなる。(10月) 石碑が建てられる。(11月)
明治16年	コッホによってコレラ菌が発見される。
明治30年 頃	石碑が今の府中公園に移される。

藤野昌言の経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、昌言の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	毎年10月6日に、藤野昌言の遺徳を偲ぶ「昌言祭」が、藤野家の子孫や関係者が集まり行われている。	昌言は、父親の死をきっかけに医者として生きていくことが、自分の目標であると心に決めた。また、医者になってからも患者に味噌や米を置いて帰ったり、熱心に勉強に励んだりした。	全国的にコレラが流行。多くの死者が出るが、原因も治療法もわからない。こういった状況の中で、医者として府中の人々の命を救うため研究を続けながら誠実に治療に当たった。 体調を崩した日も、要請に応え、患者の往診をし、自らコレラに感染し命を亡くしてしまう。	地元の多くの人たちによって感謝の気持ちを込めた石碑が建てられた。 この慰霊祭を「昌言祭」と呼び130年以上経った今も続いている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

本資料は、府中市に生まれ育った藤野昌言の生き様を取り上げている。藤野昌言は、医師になるため大阪で学んでいたが、父親が亡くなり、志半ばで地元府中市に帰り、医師として働く傍ら、漢学の勉強に励んでいた。明治12年に全国的にコレラが流行し、多くの死者が出た。当時は原因も治療の方法も分かっていなかったため大変恐れられていた。医者の中には、自分に感染することを恐れて往診を断る者もいたが、昌言はどんな条件の中でも全ての患者の命を救うため治療にかけ回った。ついには、昌言もコレラに感染してしまい一生を終えるという実話である。体調がすぐれない中でも病人を助けようと往診に向かう昌言の生き様から、医者として正しいと信じる道を行動に移す強い意志とそれを貫き通すことの大切さを伝える資料である。また、先人の努力や精神が現在も受け継がれていることにも気付くことができると考える。

★【心に響くちょっといいはなし】

明治12年頃、人力車を引いていた若者がいた。彼は、毎日昌言からお呼びがかかり、昌言を乗せて往診に行くことを誇りに思っていた。人力車を引いていると、昌言が往診に行く場所は、どうも治療費が払えないような患者のところばかりなので、不思議に思い、

「藤野先生、どうして治療費が払えないような家ばかり往診に行かれるのですか。」と尋ねた。すると、昌言は、

「ありゃあのお、お金のある者は、ちょっと不安なことがあったら、すぐ相談に来る。治療費が払えん者は、ぎりぎりまでがまんして、もうどうにもならんようになって私のところに来る。だから、私が行かなければならんのは、命がどうにもならん治療費が払えん人の家なんじゃ。」

と話をされたそうだ。

これは、若者の甥にあたる方が話されていた実話である。

ウ 資料全文

「わたしが行かねば」



府中市の府中公園にあるお堂では、毎年10月6日に、たくさんの方が集まります。

今から180年ほど前のことです。

現在の府中市府中町朝日町ふじのしょうげんに藤野昌言が生まれました。

昌言は、天保13（1832）年、医者てんぽうの家に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。

19歳のある日、「父危篤きとく」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし7日目に府中に着いた時には、

お父さんはもう亡くなっていました。

父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」が、忘れられませんでした。

昌言は、迷わずお父さんの後をついで、ここ府中で医者になりました。

医者になってからも昌言は、府中の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ。」と言われるようになりました。昌言は、家での診察しんさつだけではなく、往診おうしんにも出かけました。そして、治療費が払えない患者には、

「これも薬のうち。」
と、米やみそを置いて帰ることもありました。

明治12（1879）年夏、伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急にはいたりげりをしたりする病気で、当時は原因が分からなかったので、十分な治療ができませんでした。うつた人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、あせりを感じながらも、毎晩毎晩医学の本を読んでは、薬の調合をくり返しました。

どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、昌言はいてもたってもいられず、昼も夜も、食べることも寝ることも忘れて町中をかけまわり治療を続けました。

昌言は、^{おうしん}往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に身体をふいてから家に入りました。

こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、^{しんさつ}診察時間も近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも、その日は体がだるく、どうしても^{しんさつ}診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は、

「今日は一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人のおじいさんがかけ込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、コロリにかかったのでは・・・。」

「お願いでございます。二人の命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついてたのみました。それを見た家族は、

「お願いです。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、言いました。昌言は、家族が必死に止めるのも聞かず、ふらつく足で立ち上がり、

「^{おうしん}往診いたしましょう。」

と、答えました。

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

家族は、涙ながらに押しとどめました。昌言は、しばらくだまったまま考えていました。

「いいや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、家族をふり向き強くうなずいて^{おうしん}往診に出かけました。^{しんさつ}診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」

と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

おじいさんは、何度も何度もお礼を言いました。

そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。昌言もコレラに^{かんせん}感染していたのです。

高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜ふけ、ついに息を引き取りました。昌言47歳。10月6日の出来事でした。

彼に命を助けてもらった地元の人たちは、感謝の気持ちを込め^{せきひ}石碑を建てました。

このお祭りは「昌言祭」と呼ばれ、130年以上経った今も続いています。

【参考文献】

藤野守一（著）「医師 藤野昌言」

本山町郷土史会（編）（1986）「もとやま2号」「もとやま4号」 本山町 本山町郷土史会

村上正名（著）（1981）「府中散策」 佐々木印刷出版

エ 授業展開例 -学習指導案(略案)-

昌言の人間的な弱みや葛藤と行動との対比を中心にした展開
～ 書く活動を生かした指導 ～

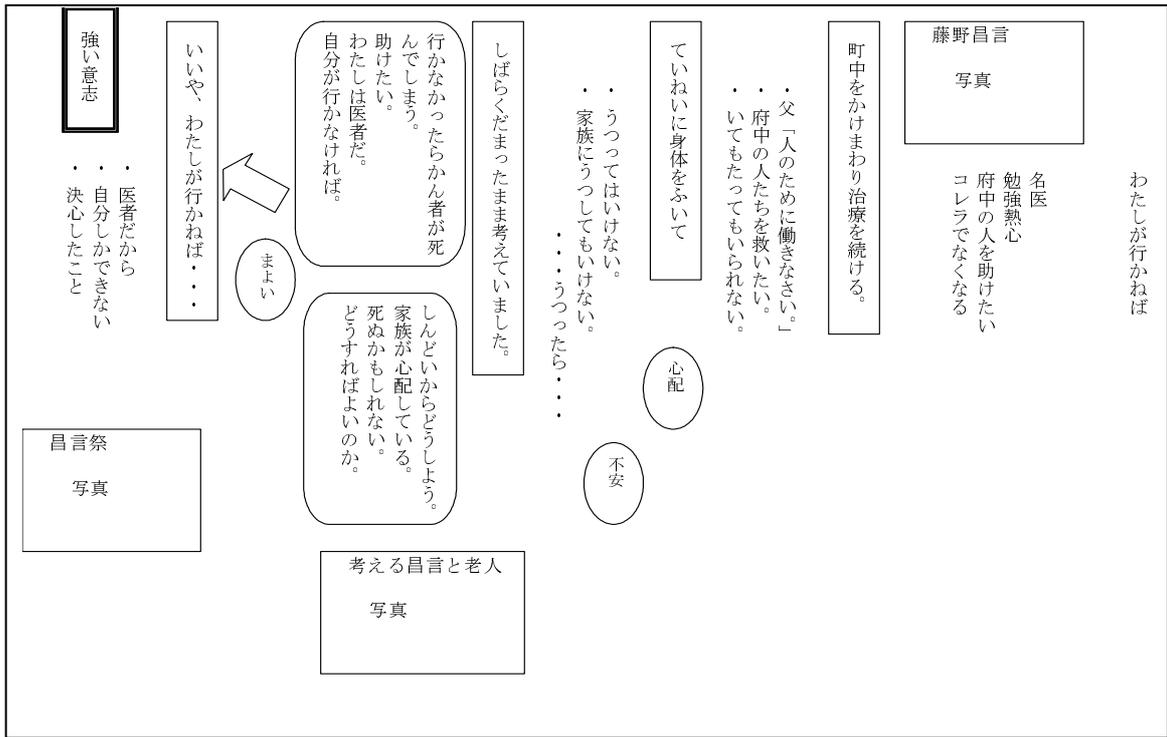
- (ア) 主題名 強い意志 1-(2)
 (イ) ねらい 家族に涙ながらに押しとどめられ、しばらくだまってきたまま考えている昌言の気持ちを考えることを通して、自分でやろうと決めたことはあきらめずに取り組み、粘り強くやり遂げようとする実践意欲を培う。
 (ウ) 資料名 「わたしが行かねば」
 (エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 藤野昌言について想起する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 藤野昌言は、どんな人だったか。 ○ 昌言祭の映像を見よう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 社会科の学習や、社会見学と関連付けて、想起させる。 ○ 今も引き継がれていることを知り、資料への興味付けをする。
展開	2 資料を読んで考える。 3 自分の生活を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 町中をかけ回り治療を続ける昌言は、どんなことを思っていただろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・父の言葉を忘れずに働こう。 ・府中の人たちを病から救いたい。 ・いてもたってもいられない。 ○ 昌言は、往診から帰って体をふいている時どんな気持ちだったのだろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分がうつつたら診察できない。うつつるわけにはいかない。 ・家族にうつつしてはいけない。 ・うつつたらどうなるのだろう。 ◎ 家族に涙ながらに押しとどめられた昌言は、しばらく黙ったままどんなことを考えていただろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・今日はしんどいからどうしよう。 ・家族に心配をかけている。 ・行かなかったら患者さんが死んでしまう。 ・自分が行かなければ誰も行く人がいない。 ○ なぜそこまでして昌言は、行ったのだろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・医者だから。 ・自分しかできないから。 ・自分でやろうと決心したことだから。 ○ 自分で決めて一生懸命がんばっていることは、どんなことだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 往診＝感染という恐怖がある中での昌言の行為であることに気付かせる。 ○ 「不安や心配なことはないだろうか。」と切り返し発問で弱さに共感させる。 ○ 昌言の気持ちをワークシートに書いて自分の考えをはっきりさせる。 ○ 「どうして医者だったら助けなければならないのか。」と切り返し発問をして昌言の気持ちに迫らせる。 ☆ 医者として正しいと思うことを貫き通そうとする昌言の強い意志に気付かせ、自ら考えを深めさせることができたか。 ○ 医者としてのやりがいや強い意思が昌言の行動を支えていたことに気付かせる。 ○ 与えられたものではなく自分で決めてがんばっていることを振り返らせる。
終末	4 まとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 藤野昌言へ手紙を書こう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 昌言と自分を重ねて見つめさせる。

(才) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		中心人物の心情	児童の意識の流れ
	中心人物 (藤野昌言)	その他の人物		
<p>○府中公園</p> <p>○医者になった藤野昌言</p>	<p>・医者になるための勉強 ・父危篤、亡くなる。 ・父の言葉が忘れられず迷わず医者になる。 ・人々を病から救いたい。 ・治療費が払えない患者の往診に出かける。</p>	<p>十月六日にたくさんの人々が集まる。</p> <p>父の言葉 「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」</p>	<p>・お父さんの後をついで、医者になろう。 ・府中市の人たちを病から救いたい。 ・お金がないなら、米やみそを置こう。</p>	<p>○医者になってからも熱心に勉強を続けるなんてすごい。 ○治療費が払えない患者も診察している。</p>
<p>○明治十二年夏 コレラが全国的に流行</p>	<p>・毎晩毎晩、医学の本を読んで薬の調合をくり返す。 ・昼も夜も食べることも寝ることも忘れて町中をかけまわり治療を続けた。 ・往診から帰ると、家の外で着物を脱ぎ、ていねいに身体をふいてから家に入る。</p>	<p>府中の人々 ・コレラにうつり、コロコロとなくなる。</p>	<p>・どうしたら病気を治すことができるのだろう。 ・府中の人々を助けたい。 ・コレラにかかってはいけない。 ・家族にうつしてもいけない。</p>	<p>○食べることも寝ることも忘れて治療を続ける。 ○昌言や家族にうつったら大変なことになる。</p>
<p>○二カ月後の秋</p>	<p>・体がだるく、どうしても診察室に足が向かない。 ・ふらつく足で立ちあがり「往診いたしましょう。」 ・しばらくだまったまま考える。 ・「いや、わたしが行かねば。」家族を振り向きうなずいて往診に出かける。</p>	<p>家族 ・今日は、休んでくださいとたのむ。 おじいさん 「二人の生命をお助けください。」 家族 「どうか今日だけは、お休みください。」と必死で止める。 「あなたが倒れてしまいます。」と涙ながらに押しとどめる。</p>	<p>・もうすぐ患者が来るのに体がだるい。 ・二人を助けるために、往診しよう。</p>	<p>○大丈夫だろうか。 ○昌言も疲れ果てているのにどうするのだろう。 ○家族も心配している。</p>
<p>○昌言祭</p>	<p>・その場に倒れる。 ・コレラに感染 ・高熱に苦しみながらも患者を心配する ・息を引き取る。四十七歳</p>	<p>おじいさん 「これで助かります。ありがとうございます。」</p> <p>感謝の気持ちを込めて、石碑を立てる。</p>	<p>・私が行かなければ誰も行く人はいない。医者だから行かなくては大変なことになるところだった。 ・自分が死んだら患者たちはどうなるのだろう。</p>	<p>○こんな状態でも昌言は行くのか。 ○医者になって人のために働こうと決めたことを最後まで貫いている。</p>

(カ) 板書例



【板書の構成】
 ポイントになる言葉を短冊で用意したり、昌言の思いがよく分かるように、言葉を整理したりして板書する。特に、中心発問については、行こうかどうしようかと迷っている気持ちを上段と下段に分けて整理し、揺れている気持ちを視覚的にはっきりさせる。その上で、行かなくてはこの思いに至る価値の高まりが分かるように工夫する。そして、「いいや、わたしが行かねば。」と決心した思いにつなげる。

(キ) ワークシート

わたしが行かねば

年 組 ()

☆ 家族に押しつけられた言葉を、じっと
ためたお母さんなじみを変えてくれたため。



A large, rounded rectangular area with a dashed line border, intended for writing. It contains ten horizontal dashed lines for writing practice.

(2) 活用のポイント

昌言は、医者になろうと決心したことを最後まで貫き通している。自分の体は省みず、府中の人々を救いたいという思いで診察を続けている。強い意志をもって診察に当たる昌言の立場に立って、その思いを考えさせることで、自分で決めたことを粘り強くやり遂げようとする実践意欲を培うことができると考える。

そのために、昌言の心情に焦点を当てた発問をする。まず、けんめいに診察する昌言の気持ちを問うが、そこで、自分も感染する心配があった中での行動であったことに気付かせる。それは、往診から帰って体をふく行為からも考えさせられる。中心場面では、いったんは「往診いたしましょう。」と答えたものの家族に涙ながらに押しとどめられて葛藤する昌言の気持ちを考えさせたい。

そこで、中心発問では児童に自らじっくりと考えを深めさせるために、書く活動を取り入れる。そして、思いを交流する中で、「いや、わたしが行かねば・・・」と言う昌言の言葉につなげることで、迷った末に医者として正しいと思うことを貫き通そうとする昌言の強い意志に気付かせる。その際、「なぜそこまでして行ったのだろうか。」と考えさせることで、医者としてのやりがいや強い意志が昌言の行動を支えていたことに気付かせる。終末では、昌言の手紙という形で昌言の生き方と自分を重ねて見つめさせる。

自分たちが知らない時代の資料にスムーズに入るためには、場面絵を活用するなど資料提示にも工夫が必要である。昌言祭は、地元の人々に受け継がれ、今も続いている。昌言の強い意志が、130年以上経った今でも引き継がれていることを感じさせてくれる。

ア 発問の工夫

昌言の行動の底にある心情に焦点を当てた発問にする。中心場面では、家族に涙ながらに押しとどめられて迷う昌言の気持ちを考えさせる。

イ 書く活動を生かして

- ・中心発問では、昌言の心の葛藤をじっくり考えさせるためにワークシートに自分の考えを書かせる。

- ・終末の昌言への手紙は、自分で決めたことで、あきらめずに粘り強く取り組んでいることを書かせる。

ウ 資料提示の工夫

- ・導入では、学習したことと関連させて、藤野昌言の功績や社会状況について想起させる。
- ・資料をより身近に感じさせるために、実際に行われている昌言祭の様子を映像で見せる。

(3) 授業の実際—児童の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

展開では、まず町中を駆け回り治療を続ける昌言の思いを考えさせた。児童は、医者になろうと決心した思いを忘れず、府中の人を助けたいと治療を続けている昌言の思いをとらえることができていた。

そして、往診から帰って体をふいている昌言の思いを考えさせた。「不安や心配はないだろうか。」と補助発問を考えていたが、もし自分にうつつたらどうなるのだろうかという不安や心配な気持ちは、児童の発言の中から出てきた。

中心場面では、「家族に押しとどめられた昌言は、しばらく黙ったままどんなことを考えていただろう。」と発問した。いったんは往診しようと思ったものの、家族に押しとどめられて葛藤する状況を考えさせるために、書く活動を取り入れた。交流する時に、「医者だから行く。」という考えに、「どうして医者だったら行かないといけないのか。」と切り返すと、「自分で行って助けたい。」「自分が決めたことだから。」と強い決心、意志があったことを考えることができた。また、「自分だったら怖くていけないかも。」と、人間としての弱さに気付く発言が出ることで、昌言の意志の強さをより深く考えることができた。

イ 書く活動を生かして

中心場面では、「どうしたらよいのだろうか。」と迷う気持ちや、「自分がコレラにかかったらどうなるのだろうか。」という不安な気持ちが出てきた。しかし、ほとんどの児童が、「患者を助けたい。」「わたしが行かないと死んでしまう。」「医者だから行こう。」と考えた。家族に引き止めら

れて迷いはあったが、自分が決めた医者として成すべきことを貫き通そうとする昌言の思いに迫ることができた。

終末では、自分を振り返り、自分で決めてがんばっていることを昌言への手紙という形に表した。

- ・昌言さんは、いやだと思う時はありませんか。わたしは、時々もういやという時があります。でも、わたしが決めたので、もっとがんばろうと思います。
- ・昌言さんと同じように、自分が出ると決めたピアノのコンクールでうかるようにがんばります。
- ・昌言さんの強い意志で勇気もてました。わたしも、ゆめをもってがんばっていきたいです。このように、昌言の生き方と自分の努力を重ねてとらえることができた。

ウ 資料提示の工夫

昌言の生い立ちや、時代背景などは、事前に学習したことを想起する事で、資料の世界にスムーズに入ることができた。

また、導入で昌言祭の実際の映像を見たことは、児童の興味を引き付け、資料への関心を高めることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

○ 社会科

事前に「わたしたちの府中市」という副読本を活用して『コレラとたたかった藤野昌言』を学習する。昌言の生い立ちや時代背景について知ることができる。

○ 特別活動（社会見学）

府中公園そばに藤野神社や石碑が建てられている。日常的に訪れる機会はありませんので、社会見学などの機会を利用して現地を訪れ、自分の目で確かめると資料がより効果的である。

○ 特別活動（発表会等）

学習した内容を、発表会等の機会を利用して劇化する事も考えられる。他の学年や地域の人々へ広める場にもなる。

(5) 心のノートを活用

○ 終末で、「心のノート」P.17を活用する。

「目標をもってチャレンジしよう」に自分の目標を記入し、やり遂げようという実践意欲を高める。

○ 事後指導で、「心のノート」PP.18-19を活用する。

自分が決めた目標を続ける秘訣を聞いて生かそうとする気持ちをもたせ、目標達成時に色をぬることにより、継続へのさらなる意欲を育てる。



教材活用例(2) 「希望の花」

〔小学校高学年 主題：希望をもって 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—川尻浦久蔵^{かわじりうらみひさくさう}—について〉

川尻浦久蔵は、江戸時代日本に初めて種痘法を持ち帰った人物である。しかし、当時の藩には相手にされず、持ち帰った種痘は没収されてしまい、国内で先駆けとなるはずだった種痘法を普及することはできなかった。

久蔵は、漂流をきっかけとして、様々な困難にぶつかった。それらに立ち向かって生き抜いてきたからこそ、種痘法に出会い、日本に持ち帰ることができたのである。

天明7年 (1787年)	川尻村に生まれる。
文化7年 (1810年)	新酒番船「観亀丸」に水主として乗り込み出発。
文化7年	嵐に遭い破船する。太平洋を漂流。
文化8年	ロシアのカムチャッカ半島に座礁する。
	医師ミハイラ先生と出会う。 凍傷の手術により、足の指を切断する。
文化9年	乗組員達が日本に帰る船が出航する。 久蔵一人、ロシアに残される。
	義足をつけて歩けるようになる。
文化10年	種痘法に出会い、久蔵も種痘法を行うようになる。
	種痘を持って日本に帰国する。

川尻浦久蔵^{かわじりうらみひさくさう}の経歴

(イ) 4コマ絵

久蔵がぶつかった困難と、それによって種痘法に出会ったことを史実を基に整理した。そして、久蔵が困難を一つ一つ乗り越え、前向きに生きていこうとする場面を中心とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	漂流したロシアで吹雪の中をさまよひ、行き倒れた久蔵は仲間とロシアの人たちに救われるが、凍傷のため、足の指を切断する手術を受ける。	凍傷の手術をした足の傷が治っていなかったため、日本に帰ることが許されず、一人ロシアに残され、氣力を失う。	ロシアの高い医療技術を目の当たりにする。 ミハイラ先生の下で、種痘法を行うようになる。	種痘法に必要な道具をそろえて、日本に帰る船に乗る。

イ 資料の解説

【作成の要点】

学習指導要領解説には、「・・・様々な生き方への関心を高めるとともに、計画的に努力目標を立て、くじけずに希望と勇気をもって取り組み、その理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てる必要がある。その際、希望をもつことの大切さや挫折感を克服する人間の強さについて考えられるようにする・・・。」と記述されている。

主人公である川尻浦久蔵は、予期していなかった船の遭難から、さまざまな困難にぶつかる。しかし、それらの困難に一つ一つ立ち向かい、前向きに生きていこうとする強い意志と実行力があつた。さらに、種痘法に出会い、体の不自由な自分でも人のために役立つことができるという希望をもつことで、さらに意欲をもつことができ、前向きに生きていこうとする。

このような、川尻浦久蔵の生き方にふれることで、困難なことに出会っても希望をもって取り組んでいこうとする心情を育てていけると考え作成した。

また、川尻小学校のPTAは、「ふるさと川尻をこよなく愛し、川尻のために尽くそうとした人物がいたことを、子どもたちに語り伝えていきたい。」と絵本「川尻浦久蔵」を作成している。本資料を活用して学習を進めていく中で、川尻浦久蔵の気持ちや行動を支えた故郷川尻への思いにもふれさせていくこともできると考える。



【心に響くちょっといいはなし】

平成16(2004)年、川尻小学校創立130周年という節目の年に、この物語を自分たちの手で子どもたちに語り伝えようという計画がもち上がり、PTAが絵を描いたり物語を編集したりして絵本を発行。低学年向けと高学年向けの本を作成している。

絵本発行に当たって、昭和60年に刊行された「花渡る海」の内容を参考にしている。

(その中に、天然痘予防接種をした部分がはれると小豆のように赤みをおび、小さな花のように見えたという件がある。このような状態になれば、一生天然痘にかからないということである。ちなみに、本資料の題名は、そのエピソードを基につけたものである。)

作者である吉村昭氏は、平成16(2004)年5月29日の読売新聞の歴史エッセーで次のように語っている。

小学校のPTAの婦人達が、久蔵を主人公にした私の小説「花渡る海」(中公文庫)を読んで、郷土でも知られることのない久蔵をせめて小、中学生にも知ってもらおうとして絵本をつくった。文章も絵もよく、それらが小、中学生に贈られている。

久蔵は、初めて郷里でよみがえったのである。このような市井の婦人たちの行為が、日本の歴史をより豊かなものにしてゆく。「花渡る海」を書いた私としても、書いた甲斐があつたと思っている。

ウ 資料全文

「希望の花」

今から200年ほど前の江戸時代のことである。

久蔵^{きゆうぞう}たち船乗りを乗せた樽廻船^{たるかいせん}⁽¹⁾は、江戸を目指して旅立った。しかし、何日か過ぎた頃、海は荒れくるい、一番大事な舵^{かじ}が強い波にもぎとられてしまった。食料も水も少なくなる中、船は2ヶ月半の間、広い太平洋を流され続けた。ようやくたどり着いたところは、氷におおわれた国、ロシアのカムチャッカ半島⁽²⁾だった。

船乗りたちは、吹雪の中、助けを求めて歩き始めたが、そこは見渡す限り氷の平原でしかなかった。寒さのために次々と仲間が死んでいった。久蔵もとうとう一歩も歩けなくなり、氷のように冷たい雪に埋もれて体の感覚もなくなっていった。自分も死んでしまうのだとあきらめそうになる度に、故郷の景色や母の姿が浮かんでは消え、運よく仲間やロシアの人たちに助け出されるまで、なんとかふんばることができた。

しかし、雪の中に3日間も埋もれていた久蔵の足の指はひどい凍傷になっていた。ロシアの医師、ミハイラ先生に診てもらおうと、凍傷になった足の指を切り取らなければ、全身が腐ってやがて死んでしまうと言われた。そのころの手術^{ますい}は麻酔もなく、想像を絶する痛みと苦しみをともなうものだった。久蔵は迷ったが、歯を食いしばり激しい痛みをたえ、右足の指2本と左足の指すべてを切り取る手術をうけた。

その頃、船乗りたちは、ロシアの船で日本に帰ることができることになった。久蔵も、日本に帰りたい一心で痛みをこらえ船に乗ったが、まだ傷口が完治していないことを理由に、一人船から降ろされてしまった。

翌朝早く、船の出発を告げる合図で目を覚ました。周囲を見渡したがだれもいない。自分一人が取り残された孤独感に、久蔵は顔を手でおおい、体をふるわせて泣いた。

それからというもの久蔵は、食事をとることもしなくなり、ただ横になっているだけの毎日が続いた。

そんなある日、天然痘^{てんねんとう}⁽³⁾の予防接種の話⁽³⁾を耳にした。当時、天然痘は世界中で恐れられていた伝染病だった。

「日本では、天然痘は、流行すれば多くの者が死んでしまう病気なのです。本当にそれを予防することができるのですか。」

異国の地ロシアであっても本当にそんなことができるとは信じられなかった。

「確かに、一度天然痘にかかると死ぬ可能性は高い。だからこそ予防をするのだ。」

真剣に話すミハイラ先生の言葉に興味をもった久蔵は、予防接種を見せてもらうことにした。

ミハイラ先生は、子どもたちに腕を出させ、次々と小刀で傷をつけてから薬を塗りつけ、布を巻いていった。

(これだけ?)

一生、天然痘にかからない方法だというので、大がかりなことをするにちがいないと思っていた久蔵は、あまりにも簡単な方法にあっけにとられてしまった。久蔵の故郷では、毎年、天然痘の流行がしずまるようにと大々的に祈とう⁽⁴⁾が行われていたことを思い出した。それでも、たくさんの人が天

然痘で命を失っていたのだ。

久蔵はその夜、ミハイラ先生の部屋に行き、あらためてその日見た天然痘予防の方法について尋ねた。その技術は、聞けば聞くほどすばらしかった。熱心に聞いていた久蔵を見て、ミハイラ先生は5日後の診察も見にくるようにと言った。

5日後、予防接種をした子どもたちが集まってきた。ミハイラ先生を見るなり泣き出す子もいたが、ミハイラ先生はおかまいなしに、その子たちの腕を出させ、見つめると、

「アニ ツバート（花が開いた）」

と笑顔で満足そうに言い、親たちとともに喜んでいた。

「花？」

久蔵も、子どもたちの腕を見せてもらおうと先日予防接種をした部分がはれて小豆のように赤みをおびていた。それはたしかに小さな花のように見えた。

「なぜ、そんなに喜んでおられるのですか。」

「子どもたちの腕にこの花が咲けば、子どもたちは一生天然痘にかからない。」

「それは本当ですか。ミハイラ先生、私にも予防接種の方法を教えてくださいませんか。」

「次に私が予防接種をするのを、よく見ていなさい。きっと君にもできるようになる。」

久蔵は体がふるえるのを感じた。

その日の帰り道、氷の溶け出した海に目をやった。故郷のおだやかな海とそこでくらす人々を思い浮かべながら、久蔵は固く口を結んでうなずいた。

それからというもの、久蔵は毎日ミハイラ先生のもとに通い、予防接種があると聞けば、助手として付き添い、大切なことをもらさないように見たり聞いたりメモに書きとめたりした。天然痘予防についての本も読んだ。そのうち、ミハイラ先生から許しを得て、久蔵も一人で予防接種ができるようになった。くり返し予防接種を行うと手際よくできるようになり、ロシアの人たちから「ドクトール キュンゾ（久蔵先生）」と呼ばれるようになった。

ついに、久蔵が日本に帰ることが決まった。久蔵の「故郷に持ち帰り、医者としてたくさんの人の命を救いたい」という強い思いに、ミハイラ先生は、予防接種に必要な道具をそろえてくれた。

いよいよ船出の時、久蔵の胸は高鳴っていた。そして、行く手に広がる、きらきらと輝く海をじっと見つめていた。

【注】

- (1) 江戸時代に、主に上方から江戸に酒荷を輸送するために用いられた廻船（貨物船）のこと。
- (2) ロシア連邦東部にある大きな半島。アジア大陸北東部に位置し、北北東から南南西に長く伸びている。
- (3) 伝染力がきわめて強く、昔は大流行を繰り返して多数の死亡者を出した急性発疹性伝染病。
- (4) 修行によって得たと信じられる法力によって信者のさまざまな欲求を実現しようとする行為。

【参考文献】

吉村 昭（著）（1988）「花渡る海」中央公論新社

川尻町立川尻小学校 PTA（発行）（2004）「川尻浦久蔵」

川尻町誌編さん委員会・呉市史編さん委員会（編）（2007）「川尻町誌 資料編」

川尻町誌編さん委員会・呉市史編さん委員会（編）（2008）「川尻町誌 通史編」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

故郷への思慕を支えに希望をもって生きようとする久蔵の気持ちを考える展開
～ 心情曲線を活用した指導 ～

(ア) 主題名 希望をもって 1ー(2)

(イ) ねらい 天然痘の予防接種に出会った時の久蔵の気持ちを考えることを通して、希望と勇気をもって着実に前進していこうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「希望の花」

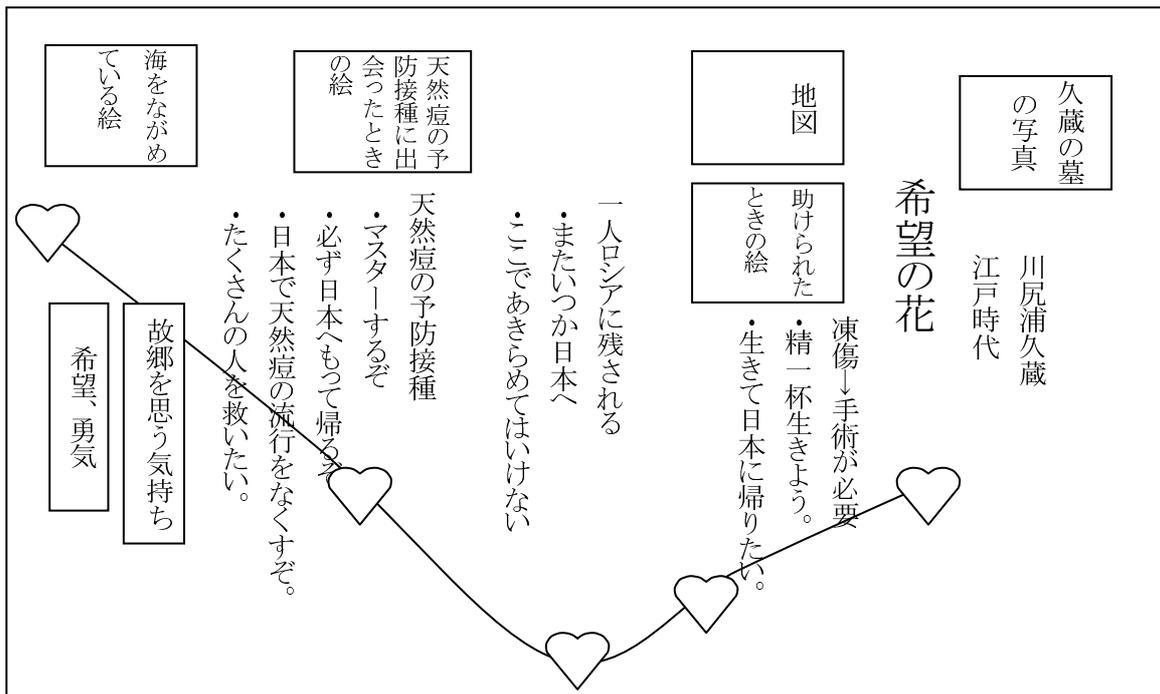
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 写真を見て、久蔵の存在について知る。	○ 1枚の写真を見てみましょう。 ・お墓の写真だ。 ・だれのお墓だろう。	○ 地域の方が今も大切に守っているお墓であることを伝え、久蔵のことを知らせる。
展開	2 「希望の花」を読んで考える。	○ 迷いながらも久蔵が、手術を決めたのはなぜだろう。 ・死にたくなかったから。 ・精一杯生きよう。 ・生きて日本に帰りたい。 ○ 一人だけロシアに残され、ただ横になっているだけの日々を過ごす久蔵は何を考えていただろう。 ・もう生きる望みもない。 ・もう故郷をみることはないだろう。 ・これからどうなっていくのだろう。 ◎ 固く口を結んでうなずいたときの久蔵は、どんな気持ちだったのだろう。 ・天然痘の予防接種をマスターするぞ。 ・必ず、この方法を日本へ持って帰るぞ。 ・日本に帰って、天然痘の流行をなくすぞ。 ○ 行く手に広がる、きらきらと輝く海は久蔵に何を語りかけているのだろうか。 ・あきらめないでよく頑張った。 ・君の未来は希望にあふれているよ。 ・故郷に帰ってもしっかり生きていこう。	○ 場面絵や地図等を提示し、内容をつかめるようにする。 ○ 久蔵の気持ちを、心情曲線で表し、気持ちの変化が分かるようにする。 ○ 見知らぬ土地にただ一人残され、絶望感から生きることへの希望を失いどん底にある久蔵の心情をしっかりおさえる。 ○ 久蔵の故郷への思いが久蔵の希望や勇気を起こさせたことに気付かせる。 ☆ 心情曲線を板書することにより、久蔵の気持ちの高まりをつかみ、自分なりに思考を深めることができたか。
展開	3 生活を振り返って考える。	○ くじけずに頑張ってたよかったなと思うことはありませんか。	○ 努力には、強い心や周囲の人などの支えがあることに気付かせる。
終末	4 教師の説話を聞く。		○ 教師の体験談を話し、生活へと広げる。

(才)資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情(久蔵)	児童の意識の流れ
	中心人物(久蔵)	その他の人物(ミハイコ先生)		
<p>○漂流したロシアで吹雪の中をさまよひ、行き倒れた久蔵が仲間とロシアの人たちに救われる。</p> <p>○凍傷のため、足の指を切断する手術を受ける。</p> <p>○足の傷が治っていないがため、日本に帰ることが許されない。</p> <p>○天然痘の予防接種があることを知り、ミハイコ先生の下で、種痘法を行う。</p> <p>○種痘法に必要な道具をそろえて、日本に帰る船に乗る。</p>	<p>・雪に埋もれてしまい、故郷を思い出しながら、もう死んでしまうのだとあきらめそうになるが、故郷や母の顔を思い浮かべふんばる。</p> <p>・仲間とロシアの人たちに助け出されたが、足の指が凍傷になっていた。</p> <p>・迷いが、手術することを決心する。</p> <p>・一人船から降ろされ、船の出発の合図を聞きながら、孤独感を感じる。</p> <p>・種痘法について知り、日本にこの医術を伝えたいと希望を持ちながら、自分で予防接種をするようになる。</p> <p>・種痘法に必要な道具をそろえてもらい、意気揚々と出発する。</p>	<p>・凍傷について伝え、手術を行う。</p> <p>・落ち込んでいる久蔵を何度も励まします。</p> <p>・種痘法について教える。</p> <p>・種痘法に必要な道具をそろえて持たせる。</p>	<p>雪中からの救出</p> <p>・生きて故郷に帰らなければ。 ・生きていてよかった</p> <p>手術を決心</p> <p>・死にたくない。 ミハイコ先生を信じよう</p> <p>一人ロシアに残る</p> <p>・みんなと一緒に日本へ帰りたい。 ・このまま死んでしまった方がましだ</p> <p>種痘法を知る</p> <p>・種痘法を学ぼう。 ・種痘法を日本へ持ち帰りたい</p> <p>帰国</p> <p>・故郷を持ち帰りたい。たくさん人の命を救いたい。</p>	<p>○助かってよかったな。</p> <p>○よく決心したな。</p> <p>○故郷に帰ることができなくて、かわいそうだな。頑張ってほしいな。</p> <p>○故郷のことを思っていて頑張ったんだな。目標を持つことで、人は頑張ることができるんだな。</p>

(カ) 板書例



【板書の構成】

場面絵や地図等を示しながら、久蔵に降りかかった困難を場面ごとに整理して板書する。それぞれの場面で、久蔵の「心の温度」について考えさせハートを板書していく。そのハートをつないで心情曲線に表し、心情が高まったときに、故郷を思う気持ちが支えとなっていたことを感じ取らせる。

(キ) ワークシート

希望の花

☆固く口を結んでうなずいたときの久蔵は、どんな気持ちだったのだろう。

年組 (

)

Large rounded rectangular area with seven vertical dashed lines for writing.



(2) 活用のポイント

本資料には、主人公である川尻浦久蔵が、予期していなかった船の遭難から、次々とぶつかる様々な困難に、一つ一つ立ち向かい、前向きに生きていこうとする実行力が描かれている。

久蔵は、自分の生き方について明確に目標を立て、それに向かって生きていたわけではない。しかし、漂流したロシアで種痘法に出会い、体の不自由な自分でも人のために役立つことができる、そしてその技術を日本へもち帰りたいという思いから、希望をもち、前向きに生きていこうと努力した。特に、絶望に打ちひしがれる久蔵がみせる人間の弱さは児童にとって共感しやすいものと考えられる。また、そこから希望を見出す久蔵の姿（心の動き等）から、児童に希望をもつことの大切さや挫折感を克服する人間の強さについて考えさせることは、自分の夢や希望が膨らんでくる時期の児童にとってよい機会となるものと考えられる。

そこで、次のような工夫を取り入れた。

ア 発問の工夫

久蔵が、くじけそうになりながらも故郷のことを思いながら前向きに進んでいこうとする場面を取り上げて発問することで、久蔵の生き方への関心をもたせていきたい。

特に、中心発問では、種痘法に出会って希望をもつ久蔵の姿をより深く考えさせるために、故郷への思いが久蔵の希望や勇気を起こさせたことに気付かせていきたい。

イ 心情曲線を活用する工夫

久蔵は、くじけそうになりながらも、故郷の景色や家族を思い出すたびに、希望をもち立ち上がろうとする。その心情の変化を「心の温度」として考えさせ、ハートを板書していくことで分かりやすくまとめる。さらに、そのハートを線でつなぎ心情曲線を完成させることにより、久蔵の気持ちの高まりをつかませ、自分なりに思考を深まらせていきたい。

ウ 資料を提示する工夫

本資料は、久蔵の様々な困難を描くため多くの場面が登場する。また時代背景も久蔵の気持ちを考えるためには欠かせない。

したがって、資料を短時間で分かりやすく理解

させるために、久蔵の絵本の中から挿絵を活用し、紙芝居のように提示しながら読んだり、地図を活用したりするなどの工夫が考えられる。

また、児童の反応を見ながら、理解しにくいところには注釈をいれながら資料提示をすることも大切である。

エ 書く活動の工夫

中心発問においては、ワークシートに書く活動を取り入れ、希望を見出したときの久蔵の気持ちについて、十分に時間をとって書かせたい。そのことにより、児童が自ら考えを深めたりする機会としたい。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

久蔵は、あまり知られていない人物であるため、導入では、久蔵の墓の写真を提示し、人物や時代背景に迫っていった。その際、子孫のない久蔵ではあるが、地域の方が大切に守ってきていることを知らせることで、身近に感じさせることができた。

展開では、様々な困難に立ち向かう久蔵の姿に共感させるために、久蔵がくじけそうになった場面を基本発問として取り上げた。心情曲線を活用するために、まず、場面ごとの久蔵の気持ちを「心の温度」に表させた。ハートを動かしながら自分が思うところで挙手させ、その理由を言わせることで、久蔵の気持ちを考えさせた。しかし、くじけそうになったとき、それを克服して努力するときの久蔵の気持ちを対比させようとする、発問が多くなり、時間不足となった。そのため、基本発問は、故郷を思う久蔵の気持ちが引き出せるものに整理し、補助発問を行うことで対比ができるようにした方がよかった。

中心発問については、天然痘の予防接種ができることを知ったときの久蔵の気持ちや久蔵が進んで天然痘の予防接種をするようになった理由を発問したが、「みんなを助けたかった」「この技術を広めたい」など、努力していこうとする前向きな意見は出るものの、その技術のない日本へ持ち帰ることを夢見て努力する久蔵の思いになりにくかった。そこで、海を隔てた日本への思いを感じさ

せるように、海を眺める久蔵の姿を資料に加え、その思いを中心発問で問うことで、故郷に対する久蔵の思いにも迫ることができるのではないかと考えた。

展開後段や終末では、単に体験談に終わることのないように留意し、くじけずに努力したときの思いを振り返らせたり、それを支えてくれる人がいたことに気づかせたりすることで、「がんばろうと思う気持ちがあれば変わる」「どんなにつらいときでも支えてくれる人がいる」などの感想をもたせることができた。

イ 心情曲線を活用する工夫

久蔵の心情に迫るために、場面ごとに久蔵の「心の温度」を考えさせた。久蔵の心の温度を上げたものは何だったのかと問い返すことで、その時の久蔵の強い思いや心の支えとなった故郷についてふれることができた。しかし、資料の中にもたくさんの困難があり、その都度詳しく聞いていくと、時間がかかりすぎてしまった。そのため、焦点を絞って発問し、その前後の心情について対比させるような切り返しをしていくことで、関連させた発言を引き出せるのではないかと感じた。

ウ 資料を提示する工夫

時代背景もあり、内容がつかみにくいため、地図を用意したり、川尻小学校のPTAが作成した絵本の挿絵を見せながら資料を読み進めていくことで、場面場面の状況がつかめるようにした。また、資料を読みながら、わかりにくいところには注釈を入れるなどしていくことで、理解しやすくなった。しかし、資料そのものが長いため、資料提示だけで時間がかってしまった。資料提示は、挿絵をもとに内容把握ができるようにして、詳しく説明をしたいところは、発問をしたとき等にすることもよいと感じた。

エ 書く活動の工夫

中心発問について考えさせるところに、ワークシートを用意した。授業では、天然痘の予防接種ができることを知ったときの久蔵の気持ちや久蔵が進んで天然痘の予防接種をするようになった理由について書かせたので、予防接種だけに絞られた意見が多かった。

授業の終わりに、振り返りとして学んだことや

考えたことも書かせた。ほとんどの児童が、あきらめずに希望をもってがんばることの大切さについて書いていた。また、地域に久蔵のような先人がいたことへの驚きや誇りについて書いている児童もみられ地域教材を扱うことの大切さも感じた。

(4) 各教科等(体験活動を含む)との関連

久蔵は、鎖国が行われていた江戸時代に生きた人物である。当時、異国の地を踏むことは犯罪であり、再び日本へ帰ることは死をも意味する。そのような時代の中で、久蔵がロシアで経験した出来事は、想像を遙かに超えるものであったに違いない。

しかし、久蔵は故郷を愛し、故郷を思いながら、新しい医術と向き合い、その技術を故郷に帰って発揮しようとする。

時代背景を踏まえた上で、久蔵がぶつかった困難や前向きな態度について考えられるよう、本資料を学習する時期は、社会科で江戸時代の鎖国について学習した後に実施することが望ましい。

また、資料は天然痘の予防接種について知り、胸躍らせる久蔵を中心に描いているが、資料には書ききれなかったエピソードがたくさんある。そこで、総合的な学習の時間に地域の先人調べを行うことで、道徳では知り得なかった久蔵の人生を調べていくこともできる。

(5) 心のノートを活用

ア 展開での活用

「心のノート」PP.18-19の「目標に向かう道にはいろいろなことがある」の図を活用し、板書の心情曲線と比較しながら、久蔵が乗り越えた困難や、それを乗り越えることができた理由について考えさせることができる。

また、展開後段で、「わたしが学びたい人物」について書かせることもできる。

イ 中学校の心のノートの活用

中学校の「心のノート」PP.24-25に「努力することってすばらしい」という、目標に向かうくじけない心についてまとめたページがある。くじけそうになったときに何が必要なのか、久蔵にとっては何が支えになったのかと考えさせるための資料として増刷りして活用することもできる。

教材活用例(3) 「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」

〔小学校高学年 主題：郷土愛 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—和田吉左衛門—について〉

和田吉左衛門は、大竹及びその周辺を治める庄屋である。大竹をおそった大洪水により、小方村は大きな被害を受ける。吉左衛門は、小方村を取り戻そうと、干拓工事をすることを決意し、工事に必要な費用を私財を売ったり、借金をしたりしてまで準備する。そして、干拓工事は開始されるが、途中、台風により、干拓工事が台無しになってしまう。しかし吉左衛門の村を思う気持ちは揺らぐことなく、嘉永5(1852)年に干拓工事は無事終了した。



文政元年 (1818年)	小方村に出生。
天保7年 (1836年)	小方村庄屋に任ぜられる。
弘化2年 (1845年)	洪水が起きる。新町沖干拓工事の開始。
嘉永5年 (1852年)	新町沖干拓工事の終了。
嘉永6年	割庄屋に任ぜられる。
安政6年 (1859年)	コレラ流行。コレラ患者の救済に尽力。
慶応6年 (1870年)	第二次防長の役。罹災民救助に尽力。
明治17年 (1885年)	逝去(67歳)。
明治19年	楓園和田翁の碑、建立。

和田吉左衛門の経歴

(イ) 4コマ絵

新町沖新開干拓工事を中心に、和田吉左衛門の一生を史実に基づいて整理した。吉左衛門の小方村を思う気持ちが最も強く表れている場面を中心場面とし、起承転結で構成した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	和田吉左衛門は文政元(1818)年、小方村に生まれた。自然に囲まれた小方村で友達と遊んだり、村人と楽しくかかわったりしながら、すくすくと育っていった。	吉左衛門が27歳になった時、小方村が洪水に襲われ、二度と生活できなくなるほどの大きな被害を受ける。吉左衛門は、小方村を取り戻そうと、干拓工事をすることを思いつき、私財を売ったり、借金をしたりしてまで、干拓工事に必要な費用を準備する。こうして干拓工事が開始される。	干拓工事開始から1年後。再び大きな台風が大竹をおそった。この台風により、干拓工事は台無しになってしまう。工事を再開するか、中止するかで頭を抱え込んでしまう吉左衛門であったが、小方村を取り戻したいという思いから、工事を再開することを決意する。	干拓工事が無事終了した。村人たちは、干拓工事をした場所へと移り住み、いつまでも幸せにくらした。そして、150年以上たった今でも、この土地の上で、私たちの生活が営まれている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

児童が、普段何気なく過ごしている小学校生活。その生活が、実は和田吉左衛門たちの小方を思う気持ちによって支えられ、その恩恵を受けているということ、そして、毎日通っている小学校の前にある石碑が、実は吉左衛門への感謝の気持ちをこめて村人たちによって建てられた石碑であるということ、これらの事実を知らない児童が多い。そこで、身近であるが、児童が知らないこれらの事実を資料として取り上げ、児童にとって新たな発見、驚きのある資料、児童の生活と結びつける資料を意識しながら作成した。

児童の生活と結びつける資料を作成することで、地域の一員としての自覚を高めるとともに、あいさつ運動など、様々な活動へとつなげるきっかけとなる資料にすることを大切にしました。



【心に響くちょっといいはなし】

和田吉左衛門は、西郷隆盛とも交流があった。そうした中で、西郷隆盛からその人柄を認められ、「ともに新しい日本のために尽くしてみないか。」と、誘われたが、和田吉左衛門は「私が生まれた大竹を大切にし、大竹のために尽くしたい。」と、その誘いを断った。和田吉左衛門は、その言葉通り、長州戦役で被災した人たちの救済に当たったり、コレラ患者の看病に命がけで携わったり、洪水の被害にあった小方村の村人たちのために干拓地を築いたりするなど、大竹のために尽力した。

ウ 資料全文

「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」



和田吉左衛門は、1818年小方村に生まれた。とても優しく元気な子で、友達とよく野山や海や川で遊んでいた。また、村の誰からもかわいがられ、すくすくと育っていった。

ところが、吉左衛門が27才になったある日、大変なことが小方村に起きた。大竹に大雨がふり、大こう水が小方村をおそったのである。この大こう水によって、小方村のいい谷では全ての家が流されるなどのひ害にあい、また、田や畑は二度と作物を育てることさえできなくなってしまった。村人たちは、生活することができなくなり、とほうにくれていた。

吉左衛門は、かわりはてた小方村の様子を見て、なみだを流し、その場にたちすくんだ。

しかし、「何とかしなければ。」と思い、どうすればよいかと考えた末、海に新しく土地を作る「干拓」という方法を思いついた。干拓をして、新たな田や畑を作り、村人たちに分け与えることができれば、村人たちはいつまでも幸せにらせると考えたのである。

しかし、干拓には、多くのひ用が必要である。けれども、今の小方村の様子では、村人からお金を集めることなどとうていできない。そこで、吉左衛門は、自分の家にある物を売ってお金にしたり、

借金をしたりしてまで、干拓に必よるなひ用を準備した。

こうして、ついに干拓工事が始まった。この工事には、小方村の村人など、千人をこす人々が参加し、一生けん命に工事にはげんでいった。

ところが、工事開始から一年たったある日、もうれつな台風が大竹をおそった。大雨がふり、強い風が吹きあれ、吉左衛門たちが干拓工事をしている場所に、海からの大きな波が、何度もおしよせた。吉左衛門や村人たちは、台風が通り過ぎるまでの間、心の底から工事の無事をねがうばかりであった……。

次の日、ようやく台風が過ぎ去った。しかし、まだ風は強く、小雨が降り続けている。そんななか、吉左衛門や村人は、大急ぎで工事場所へと走った。そして次の瞬間、吉左衛門たちは「あっ。」

と、声を上げ、その場にしゃがみこんでしまった。台風により、無ざんにもていぼうがこわされ、これまで一生けん命にがんばってきた工事が台無しになってしまっていたのである。

吉左衛門は、うなだれ、頭を抱え込んだ。

「これまでの苦労は、一体何だったんだ。全てが台無しになってしまった…。ここで工事を中止にすべきなのだろうか、それとも工事を続けるべきなのだろうか。」

そんな思いが、吉左衛門の頭の中を駆けめぐる。その時、吉左衛門の耳に

「これでもう、小方村は、おしまいじゃ。」

と、力なくつぶやく村人の声が聞こえてきた。村人のつぶやきが吉左衛門の心の中で、何度も何度もこだまする。

吉左衛門は、拳をぎゅっと強く握りしめた。

「私は、必ず、この工事を成功させるのだ。」

こうして、干拓工事は、再開された。村人たちも、吉左衛門の思いにこたえようと、これまで以上に必死になってがんばった。

そして、工事開始から、6年たった1852年。

ついに吉左衛門や村人たちの思いがこめられた干拓工事が終了した。吉左衛門や小方村の人々は、その完成を手を取り合って喜んだ。

その後、村人たちは新しくできた土地へと移り住み、いつまでも幸せにくらした。

そして、吉左衛門がこの世を去ってから、150年以上たった今も、私たちは吉左衛門や村人たちの気持ちがこもった土地の上でくらしている。

私たちが、毎日のように勉強したり、友達と遊んだりしている小方小学校の土地も、実は、吉左衛門たちの手によってつくられたものである。

吉左衛門がこの世を去ってから2年後、大竹に住む村人たちが、和田吉左衛門に感謝の気持ちを込めて石碑を建てた。

これが、小方小学校の前にある「楓園和田翁之碑（ふうえんわだおうのひ）」である。

【参考文献】

わたしたちのまち大竹市 大竹市教育委員会

(才) 資料分析表

発起組織	発起組織の役割・内容		主な内容 (和田君と関係)		発起の発端の経緯
○小方村 で生まれ育つ	中心村 (和田君と関係)	その他の人達 (友人・近所)	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	小方村に生まれる優しい村人や友達 に囲まれておおく喜び	田舎を訪問して遊ぶ (友達) 田舎を訪問して遊ぶ (友達)	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	変わりに来た小方村の村人の様子を 見て「遠くまで、しかも、田舎まで、 来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	本洪水の被害により、生き残った 人がおおく残った	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	
○小方村 が本洪水を 受ける	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	田舎に「遠くまで田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ、田舎まで来たんだ」	小方村で生まれ育った古左衛門	○田舎の発端の経緯	

(カ) 板書例

和田吉左衛門く新たな地を求めてく
小方の良いところ
歴史
自然
人

変わりはてた小方村を見た時

- ・かなしい
- ・小方村を取りもどしたい

うなだれ、頭をかかえこんだ時

- ・工事を再開するべきか、中止にするべきか、迷った。
- ・お金がもつと必要になる。
- ・台風がまた来るかもしれない。

吉左衛門は、どんな思いでこぶしをぎゅつとにぎりしめたのでしょうか。

- ・今までしたことが台無しになる。
- ・小方村をこのまままで終わらせたくない。
- ・大好きな小方村を取り戻したい。
- ・村人達のためにがんばらなければいけない。
- ・村のためにできることをしたい。

吉左衛門
写真

挿絵

挿絵

挿絵

【板書の構成】

板書では、資料の内容がイメージしやすいように資料提示の際に使用した挿絵を使用していく。特に、干拓工事が台無しになった場面と中心場面では、しっかりと児童の考えを板書するスペースを確保し、吉左衛門の思いについて、自分の考えを広げたり、深めたりするのに役立てていく。

(キ) ワークシート

「和田吉左衛門物語〜新たな地を求めて〜」

年 組 ()

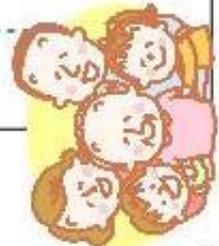
Ⅰ. 吉左衛門は、どうして工事を続けることを決めたのでしょうか。



Handwriting practice area with three horizontal dashed lines for writing.

Ⅱ. 授業を通じた「地域」について考えたことを書きましょう。

Handwriting practice area with three horizontal dashed lines for writing.



Ⅲ. 今日の授業を振り返って書きましょう。

○自分の考えをもちょうとすることができましたか。	☺	☹	☹
○友達のことを聞くことができましたか。	☺	☹	☹
○自分の考えを深めることができましたか。	☺	☹	☹

(2) 活用のポイント

本資料は、大竹市の先人「和田吉左衛門」を取り上げた資料である。そして、人手も費用もかかった干拓工事が台風によって台無しになったにもかかわらず、工事の再開を決意した吉左衛門の気持ちを考えさせることにより、郷土を愛する心情を養うことをねらいとしている。

吉左衛門は、小方村に生まれ育った。そして、吉左衛門が27歳になった時、大竹に大雨が降り、洪水の被害にあった小方村や村人たちを何とか救いたいと思い、干拓工事を開始する。その後、様々な困難にぶつかるが、それでも最後まで干拓工事を完成させる。現在、小方小学校が建っている土地も、吉左衛門たちが干拓工事をした場所の上に建っている。また、小方小学校の校門前に立っている石碑は、村人たちの和田吉左衛門への感謝の気持ちをこめて建立されている。

しかし、これらのことを知っている児童は少ない。こうしたことから、吉左衛門たち先人の努力が自分たちの生活に強く結びついていることを知る機会にするとともに、吉左衛門たちの地域を愛する思いやその恩恵を肌で感じさせることのできる資料の特性を生かした活用を考えた。

ア 発問の工夫

導入では、地域の良いところについてのアンケート結果を知ることで、本資料にでてくる地域の良さや現在の地域の良さのつながりを感じさせていく。

展開では、中心発問前に工事を中止にするか、再開するか、頭をかかえこんで悩んだ吉左衛門の思いに共感させていくことがポイントである。この場面は、この干拓工事を完成させるに当たり、吉左衛門が最も悩む場面である。小方村に生まれ育った吉左衛門は、干拓工事に必要な莫大な費用を家財道具を売ったり、借金をしたりしてまで準備した。そして、ようやく干拓工事を開始したのだが、工事開始一年後に台風が大竹を襲い、干拓工事が台無しになってしまう。工事を再開すると、費用がさらにかかるし、台風がまた来るかもしれない。また、村人たちもやる気を失っている。

こうしたなか、それでも、吉左衛門は村人たちのことを思い、干拓工事を再開させる。

この場面での吉左衛門の思いを中心発問「吉左衛門は、どうして工事を続けることを決心したのでしょうか。」と、児童に問うことにより、吉左衛門の郷土を強く思う気持ちへと迫ることができると考えた。

イ 生活との結びつき

吉左衛門の死後、村人たちが吉左衛門への感謝の気持ちをこめて、石碑を建立する。

この石碑は、小方小学校の近くに建立されているのだが、この石碑の意味を知っている児童は少ない。そこで、資料の後段においてこのことを記述する。

また、資料を範読する時には、資料の内容に合わせて、児童が小学校のグラウンドで遊んだり、学習したりしている写真や石碑の写真を視聴覚機器を活用して提示する。このことを通して、吉左衛門たちの小方村を思う気持ちがこもった土地の上で自分たちが生活していることに気付かせたり、吉左衛門の小方を思う気持ちに対する村人たちの感謝の気持ちにふれさせたりする。

これらのことを通して、児童に吉左衛門たちの功績や吉左衛門という大竹の先人を身近に感じさせることにつなげていく。

ウ ゲストティーチャーの活用

終末では、「和田吉左衛門はすごい。」という感想で終わらせないために、児童にとって身近な登下校見守りボランティアの方からの手紙を教師が代読する。

手紙の内容は、登下校見守りボランティアの方の活動に対する思い、地域に対する思いなどを中心に取り上げることとする。その際、授業のねらいに即し、ゲストティーチャーと事前に綿密な連携を図っていく必要がある。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

導入では、地域のよさとして「お店」「自然」「人」に関する意見が出た。「自然」や「人」について

は、資料での小方村の様子と結びつけることができた。

中心発問「吉左衛門はどうして工事を続けることを決心したのでしょうか。」に対しては、「村人のため」「恩返し」「村への思い」という観点から、児童は自分自身の地域への思いと対比させながら自分とのかかわりで考えを深めようとしていた。

振り返りにおいては、「小方は昔の人ががんばって作ってくれた宝だとわかった。」「地域のために何かできることをしたい。」「小方に生まれてよかった。」など、郷土愛にかかわる感想が多く出た。

授業実践を通しての課題は、大きく三点ある。

一点目は、「交流する時間の確保」である。そのために基本発問を三つから二つに変更する必要があると考えた。一つ目の基本発問は「変わり果てた小方村を見た時、吉左衛門はどんな気持ちだったのでしょうか。」、二つ目の基本発問は「うなだれ、頭をかかえこんだ吉左衛門は、どんな気持ちだったのでしょうか。」とする。

二点目は、「中心発問に対して、児童が自分の言葉で考えるようにすること」である。学習指導案にある中心発問をした場合、自分の言葉ではなく、資料中の言葉から考えている児童がいた。そこで、中心発問を「吉左衛門は、どんな思いで拳をぎゅっとにぎりしめたのでしょうか。」とすることで、児童はより自分とのかかわりを通して自分の言葉で吉左衛門の思いを考えることができるようになると考えた。

三点目は「児童の思考を焦点化させること」である。そのため、中心発問に対する児童の考えに「費用」「恩返し」「村人のために」という観点からの切り返しをしていくことで、児童が何をどう考えていけばよいのか一層明確になると考えた。

イ 生活との結びつき

吉左衛門に対する感謝の気持ちがこもった石碑の写真や児童が小学校のグラウンドで遊んでいる写真を提示したり、資料の後半を読んだ時には、児童から「へえ、知らなかったあ。」「すごい。」

など、新たな発見に、感嘆の声が上がった。

学習後には、石碑を見に行く児童や登下校中に石碑に礼をして通っていく児童の姿が見られた。

ウ ゲストティーチャーの活用

地域のことや児童のことを思い、7年間、一度も休まずに登下校ボランティアをしてくださっている地域の方からの思いがこもった手紙であったので、児童は一生懸命にその内容を聞いていた。

振り返りには、「〇〇さんからの手紙から思うことがありました。それは、私たちはいろいろな人たちから愛されているということです。わたしは、これからもっといい町にできるようにがんばりたいです。」など、地域の方に対する思いを書いた児童が多くいた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

社会科の歴史学習を通して、時代背景について理解させておくことで、資料についての理解をより深めることができる。

また、学習を通して、「地域のために何かできることをしたい。」という感想、「地域のためにがんばってくれている方に感謝したい。」という感想が多く出た。こうした思いが、総合的な学習の時間における学習発表会「和田吉左衛門物語」の発表に生かすことができた。また、地域の方への感謝の気持ちを伝える場を設定したり、地域のためにできることを考える中で、あいさつ運動をボランティアで取り組む活動へとつなげたりすることができた。

(5) 心のノートの活用

事後指導において、「心のノート」PP.104-105を活用することができる。

この授業を通して、地域を愛する心情を養った後、心のノートにある言葉にふれることにより、児童は「ふるさと」について見つめなおすことができる。また、ふるさとのために何が自分にできるのかを具体的に考えるきっかけにすることもできる。

教材活用例(4) 「武将茶人 ～上田宗箇～」

うえだ そうご

〔小学校高学年 主題：個性の伸長 内容項目：1の(6)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—上田宗箇—について〉

上田宗箇は戦国時代、織田信長や豊臣秀吉にも仕えたことのある武士である。

生きるか死ぬかの瀬戸際にいる当時の武士にとって茶道は心を安定させるためにとっても大事であった。また、茶道具は戦の交渉に使われるほど重要なものだった。

宗箇は千利休や古田織部せんのりきゅう ふるたおりべなどからお茶を習ったが、茶杓や茶碗を自ら作るなど自分なりの茶道とはどのようなものかを追究し続けた。

晩年は現在の広島県廿日市市浅原で隠棲し、お茶を楽しむ毎日を送った。上田宗箇流の茶道は武家茶道として現在まで多くの愛好家によって受け継がれている。



永禄6年 (1563年)	永禄6年 尾州星崎に生まれる。 幼名 佐太郎
天正2年 (1574年)	丹羽長秀の侍兒となる。
天正6年	織田信長に仕え初陣する。
天正13年	豊臣秀吉の家臣となる。
天正18年	千利休の百回記の茶会に参加する。
慶長6年 (1601年)	古田織部の茶会に参加する。
慶長7年	徳島藩に招聘される。
慶長10年	紀州藩に招聘される。
元和元年 (1615年)	大阪夏の陣。「敵隠れ」を作成する。
元和5年	浅野長晟に同行し広島藩に移封される。 現廿日市市浅原に隠棲する。
慶安3年 (1650年)	88歳で没する。遺言により遺骨は砕かれ早瀬の海に投げられた。

上田宗箇の経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、宗箇の生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、4場面の構成とした。

	起	承	転	結
場面イメージ ジ絵				
絵の説明	上田宗箇は戦国時代、織田信長や豊臣秀吉にも仕えたことのある武士だった。 生きるか死ぬかの瀬戸際にいる当時の武士にとって茶道は心を安定させるためにとっても大事なものであった。また、茶道具は戦の交渉に使われるほど重要なものだった。	宗箇は、千利休や古田織部にお茶についての基礎を学んだ。 宗箇は、師匠である織部から「あなたの茶道にはどんな自分らしさがありますか？」と指摘され、利休や織部のまねではない自分なりのお茶とはどんなものか悩み続ける。	大阪夏の陣のこと。待ち伏せていた竹やぶに好みの竹を見つけた宗箇はその場で茶杓を作りはじめた。敵の攻撃の中でも悠然と宗箇の好みの茶杓を作った。その茶杓は武士の力強さ、大胆さが表れ、宗箇は自分らしさをそこに見つけることができた。	宗箇は力強さだけではなく、さらに自分らしさを磨こうとやさしさや思いやりを茶道に取り入れていった。 自分流のお茶の在り方をつらぬき、武士の茶道の「美しき」とは何かを伝えた宗箇の茶道は広島に根付き、今でもたくさんの愛好家を育てている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

人は、その人にしかない性格や性質をもっている。自分の良さに気付くとともに、それを伸ばしていこうと努力すること、またその中で自分の短所にも気付きそれを改善していくことは、調和のとれた自己を形成するために必要なことである。

本資料は、戦国時代、広島に実在した武将茶人である上田宗箇について作成した資料である。上田宗箇流の茶道は、宗箇が自分らしい茶道の在り方を模索し続け、自分なりの茶道を確立したことにより現在まで受け継がれていることを、この資料によって考えさせていきたい。

宗箇は自分らしさがないことを師匠である織部に指摘され、自分らしさを求めて作品を作るのだが、ついに戦いの最中に作った茶杓を通して武士らしく、やさしく思いやりのある自分らしい茶道を見つけていくという物語である。

本資料により、自分の長所や短所、自分らしい個性を発見するとともに、その個性を自分らしく発揮していこうという心情を育てていきたい。

児童は自分の個性や自分らしさということを日常生活の中でいつも考えているとは限らない。したがって、学級活動で取り上げたり、各教科等の中で自分らしさや個性を発揮した場面などを意識させたりするなど事前・事後の取組が大変重要である。

指導に際しては、戦国時代や茶道、茶道具などをイメージさせるのは難しいため、社会科での歴史学習、総合的な学習の時間等で茶道体験をしておきたい。また、自分らしさを発揮させる場としての図画工作科等との有機的な関連を図ることが大切である。



【心に響くちょっといいはなし】

上田宗箇流の茶道は現在も広島で受け継がれている。上田流家元である「和風堂」は広島市西区古江にあり宗箇のお茶を現在に伝えている。

上田宗箇は晩年を廿日市市浅原で過ごした。殿様でありながら村人に対して「年貢や労働に困ったことがあれば、隠さず申せ。」

「弱いものをいためつけるようなことを代官がすることは許さん。」

と、大変思いやりをもっていた。また村の行事に気軽に参加し交流するため、村人から「そうかさあ」（宗箇さん）とあって親しまれた。

浅原で宗箇が3年間暮らした屋敷の周りには、青い石がごろごろして歩いて歩にくい土地だった。村人はそこを通りかかった時にはいつもその青石を取り除いていた。宗箇はその青石を庭石にして立派な庭を造った。青石を持ってくる村人には一升の米を持たせたことから、「青石一升米一升」といわれ村人に語り継がれている。

宗箇の屋敷の近くの谷にどんな日照りでも枯れることのないわき水の池があった。お茶を点てるのに、また生活用水として宗箇はそれを汲んでいた。清らかな池と宗箇の人柄を重ね村人は「お手形の水」「岩船の水」といって大切にしていた。今でも宗箇講によって行われてきた追慕祭はこの地で行われている。

また、宗箇は庭園造りにも名があり、広島市内の縮景園は上田宗箇の作庭である。宗箇が手がけた庭園は日本各地に残されている。

ウ 資料全文

ぶしょうちやじん うえだ そうこ 「武将茶人 上田 宗箇」

みなさんは、上田宗箇流という茶道の流派を知っていますか。茶道という^{せんりのりきゆう}千利休が広めたことで有名ですが、広島にはそれとは別のすばらしい武士の茶道が受け継がれているのです。

今から400年ほど前、上田宗箇という武士がいました。もとは、織田信長や豊臣秀吉に仕えたこともあり、後に芸州藩（今の広島）に迎えられ、大竹や廿日市をおさめる領主となったのです。宗箇は、体は小さかったのですが、いくさの時には勇ましい活躍をして、たくさんのほうびをもらうような武将でした。

当時、武士は、いくさのあいまに茶の湯を楽しみ、つかの間の安らぎを楽しんでいました。宗箇も茶の湯が大好きで、殿様を自分の屋敷にお迎えするときも、必ず茶の湯⁽¹⁾を点ててお迎えするほどの腕前でもありました。

宗箇は古田^{ふるたおりべ}織部という武士に茶道を習いました。織部は、信長や秀吉に仕えた有力な武士であり、千利休の弟子でもありました。織部は宗箇にお茶を伝えるとともに、宗箇の生き方にも大きな影響を与えました。

ある時、織部は自分の弟子である宗箇にこう話しました。

「千利休は静かなものに美しさを感じ茶道を作りました。私は動きのある新しいものに美しさを感じ茶道を作り上げてきました。さて、あなたの茶道にはどんな自分らしさがありますか。」

宗箇は「はっ」としました。これまで自分は利休や織部から茶道を習ってきたが、自分らしさについて考えたことはなかったからです。

「私の茶道には自分らしさがない・・・」

宗箇は大きなショックを受けました。

宗箇は自分流の茶道をもとめて、いろいろと試してみました。茶杓⁽²⁾を作ってみたり、花入れを作ってみたりしましたが、満足いくものができませんでした。茶碗も職人に任せず自分で作りました。しかしどれも利休や織部のいいところを真似ているようで、とても自分らしさを感じることはできませんでした。

「自分には新しいものは生み出せないのではないだろうか・・・」

そう悩む日々が続きました。

ある日、宗箇はいくさに出陣しました。大阪夏の陣⁽³⁾の戦いです。

宗箇はいくさの合間に心を落ち着けようと、一本の美しい竹を見つけ、茶杓を削り始めました。いつ敵が攻めてきて命を落とすかもわからない状況の中で、覚悟を決めながら、それでも使いやすいように心をこめて一心不乱に削り続けました。

無心に削った茶杓は、直線的で、実に味わい深いものでした。そして武士の力強さ、大胆で豪快な堂々たる姿があらわされていました。

宗箇はできあがった茶杓を夕日にかかげて見上げました。その茶杓は夕日を照り返し、まぶしく輝いていました。

「そうだ!これだ!これが私らしさなのだ!!」

と、大きな声でさげびました。

そこには、利休とも織部とも違った新しい上田宗箇らしさがありました。

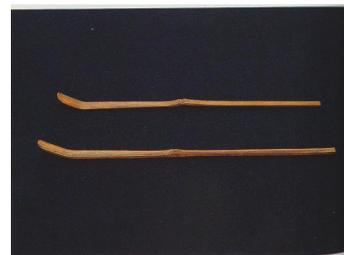
「私らしさとは、武士の強さをもったもの。いや、しかしそれだけではない。」

宗箇は、さらに自分らしい茶道を作ることに夢中になりました。

宗箇が作る茶碗や花入れには、武士の力強さが表現されており、無駄のない、りんとした美しさがありました。しかし、その強さの中にも使う人にやさしく思いやりのある繊細さや、自分なりの思いをこめたのでした。

宗箇は、武士としての強さと優しさを兼ね備えた生き方をもとに、新しい上田宗箇の茶道をついに、完成させていったのでした。

宗箇が戦いのさなかに作った茶杓は「敵がくれ」という名前がつけられ今でも大切にされています。



【注】

- (1) 客を招き、抹茶^{まっちゃ}をたてて楽しむこと。また、その作法や会合のこと。
- (2) 茶道の点前^{てまを}で抹茶をすくう細長いさじのこと。素材は主として竹であるが、象牙、金属、陶器などもある。
- (3) 元和元年（1615年）夏、徳川方が冬の陣の和議の条件に反して大坂城内堀を埋めたため豊臣方が兵を挙げ、徳川家康らに攻め落とされた戦い。

【参考文献】

- 上田宗嗣「茶道 上田宗箇流」（1934年）ひろしま文庫
渡 好美「上田宗箇とその時代」（1994年）溪水社
津本 陽「風流武辺」（2002年）朝日文庫
矢部良明「武将茶人 上田宗箇」（2006年）角川書店
久野 治「古田織部とその周辺」（2009年）鳥影社
山田芳裕「へうげもの」（2005年）講談社
季刊誌「和風」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

各教科等での体験活動を生かした道徳の時間の展開
～体験を言葉で生かし深める工夫をした指導～

- (ア) 主題名 個性の伸長 1－(6)
- (イ) ねらい 「そうだ。これだ。これが私らしさだ。」と叫んだ宗箇の気持ちを通して、自分の特徴を知ることの大切さに気付かせ、自分のよさを伸ばそうとする心情を育てる。
- (ウ) 資料名 「武将茶人 上田宗箇」
- (エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (評価の観点☆)
導入	1 自分の長所を交流し合う	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分にはどんな長所がありますか。 <ul style="list-style-type: none"> ・走るのが速い。 ・サッカーが上手。 ・習字が得意。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ねらいとする道徳的価値への方向性をもたせる。 ○ 自分の長所を学級活動などで考えさせておくなど事前の学習と関連させる。 ○ 自分の日常を振り返らせる。
展	2 資料前半を読んで考える。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 織部の言葉を聞いて宗箇は「はっ」としたのはどうしてでしょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・私には自分らしさがない。 ・自分らしさなんて気付いていない。 ・自分らしさって何だろう。 ○ 自分流の茶道を求めているいろいろと試してもなかなか納得できない宗箇はどんな気持ちになったでしょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・とてもショックな気持ち。 ・自分には無理なのではないか。 ・いくらやってもだめだ。諦めよう。 ・自分には新しいものなんて生み出せない。 ・なんとかしなければ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 宗箇と似た体験などを想起させ自分と重ね合わせて考えさせる。
開	3 資料後半を読んで考える。	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 「そうだ。これだ。これが私らしさなのだ」と叫んだ宗箇はどんな気持ちだったでしょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分に満足のいくものが出来上がったぞ。 ・自分は武士だから武士らしさを発揮すればいいんだ。 ・力強い作品になったぞ。 ・自分らしい作品になったぞ。 ・自分らしさをついに見つけたぞ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分なりのものを追究することや真摯な態度に共感させ、ねらいに迫る。 ○ 書く活動を取り入れ、自分にも独自のものを一生けん命に作った体験がないかを思い出させる。 ○ ペアトークで考えを交流させたあとクラストークに発展させる。 ☆ 自分らしさを見つけた宗箇の心情を、自分自身の体験に照らして考え、自分なりの言葉で表現することができたか。 ○ 自分らしさを見つけるだけでなくもっと伸ばしていきたいとする気持ちの高まりに気付かせる。
	4 自分の生活を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分らしさを見つけたのに「それだけではない。」と言った宗箇にはどんな思いがあったのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> ・他にもっとよいものがあるのではないかと思った。 ・もっと自分独自のものを作り続けたい。 ・さらに自分らしさを伸ばしたい。 ・自分らしさをもっと磨きたい。 ・自分にしかできないものを作り出したい。 ○ 宗箇のように自分らしいところを伸ばしていきたいと思うことがありますか。 <ul style="list-style-type: none"> ・大きな声が出せるのであいさつの仙人にまでになれるようにしたい。 ・習字が得意なのでそれを生かしてきれいなノート作りをしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 導入で行った長所についての交流を思い出させ、気持ちや思いをしっかり引き出す。
終末	5 まとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 上田宗箇流第16代家元のビデオレターを見る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 宗箇の生き方(個性の伸長)について3分くらいにまとめたビデオを視聴させる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公(宗箇)の心情	児童の意識の流れ
<p>○当時の武士とお茶の関係。上田宗箇の紹介。</p> <p>○師匠である織部に自分らしい茶道について指摘されはつとずる場面。</p> <p>○いくさの最中に作った茶杓に自分らしさを見つけたことができた場面。</p> <p>○武士の力強さ、大胆さ、豪快さ、堂々たる姿が自分らしさとわかった宗箇はまだまだ自分の個性を磨こうとする場面。</p>	<p>中心人物(上田宗箇)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・褒美をもらうほど勇ましい武将。 ・いくさの合間に茶の湯を楽しみ、つかの間のゆとりを楽しんでいた。 ・殿様を自分の屋敷にお迎えするときも必ず茶の湯を点てて迎えるほどの腰削。 ・宗箇は「はつ」としました。これまで利休や織部に茶を習ってきたが、自分らしさについて考えたことはなかった。 ・「私の茶道には自分らしさがない・・・」 ・大きなショックを受けた。 ・心を落ち着けてその竹で茶杓を作ろう。 ・いつ敵が攻めてくるかわからないが一生懸命作ろう。 ・「これだ。これが自分らしさだ。」 	<p>その他の人物(古田織部)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「利休は静かさに自分らしさを感じ、私は動きのある茶道。では、あなたの茶道にはどんな自分らしさがありますか。」 	<p>主人公(宗箇)の心情</p> <ul style="list-style-type: none"> ・武士の楽しみは茶の湯だな。 ・お殿様に茶の湯を楽しんでもらえるようにしっかりとてなすぞ。 ・私の茶道には自分らしさがないというのか？ ・「自分らしい茶道」とは一体何だということだ。 ・自分らしい茶道を見つけることができるのだろうか。 ・自分の茶道を見つめるために茶杓や花入れをつくってみよう。 ・茶碗も自分で作ろう。でも、利休や織部のまねをしているようだ。 ・自分らしい茶杓ができたぞ。 ・武士には力強さ、大胆さ、豪快で堂々としたものがある。それが私の茶道だ。 ・やつと自分らしい茶道を見つけたぞ。 ・自分らしさを見つめることはなんてすがすがしいのだ。 ・力強さだけではないのだ。 ・まだ武士らしさというのにはほかにもある。 ・やさしきと思いやりがあつてこそ本当の自分らしさだ。 	<p>児童の意識の流れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦国時代の武士にとって茶道は大切なものだったんだな。 ・宗箇も茶の湯が好きだったんだな。 ・この前茶道体験学習をしたな。おいしかった。 ・戦国時代から茶道はあったのか。 ・自分らしきとは何かを悩んだんだな。 ・自分らしきは何かと聞かれて困っただろう。 ・自分らしきと聞かれて自分なら何と答えるかな。 ・人のまねではないものを見つけるのは大変だな。 ・命がけで作った茶杓に自分らしさを見つけたこととができてよかった。うれしかっただろう。晴れとした気持ちになるな。 ・自分らしきをやつと見つけたのに、それだけでは満足しない宗箇はすごいな。 ・宗箇のように自分らしさを見つけて伸ばしていきたいな。

(カ) 板書例

武将茶人 上田 宗箇

利休の絵

織部の絵

自分らしいお茶はなんですか？

私には自分らしさが無い。
自分らしさなんて気づいていない。
自分らしさって何だろう。

宗箇の悩み

自分らしさが見つからない

はっとしている宗箇の絵

「そうだ。これだ。これが自分らしさだ。」

武士の力強さ
大胆
直線的
ごうかい

・うれしい。
・ほっとした。
・自分に満足のいくものが出来上がったぞ。
・自分は武士だから武士らしさを発揮しよう。
・力強い作品になったぞ。

もつとよくしよう
自分らしさを伸ばす
自分のよいところを磨く

花入れや茶碗の写真

無駄がない
りんとした
美しさ
やさしさ
おもいやり
自分なりの思い

【板書の構成】

戦国時代の人物の人間関係を理解させるために、人物名の短冊や人物絵を活用し、児童に臨場感をもたせ、資料へのより深い理解を促す。ただし、人物絵はWeb上では公開することができない。しかし板書や印刷配布については公共性への配慮から使用の許可がある。（山田芳裕「へうげもの」講談社）

宗箇の悩んでいるときの思いと、自分らしさを見つけたときの思いを対比させるように整理することで効果的な板書となる。また、武士の力強さ、大胆さ、直線的、豪快さなど武士としての宗箇らしさを資料提示とともに板書することで、児童が宗箇の気持ちを理解するためのヒントとなりうる。

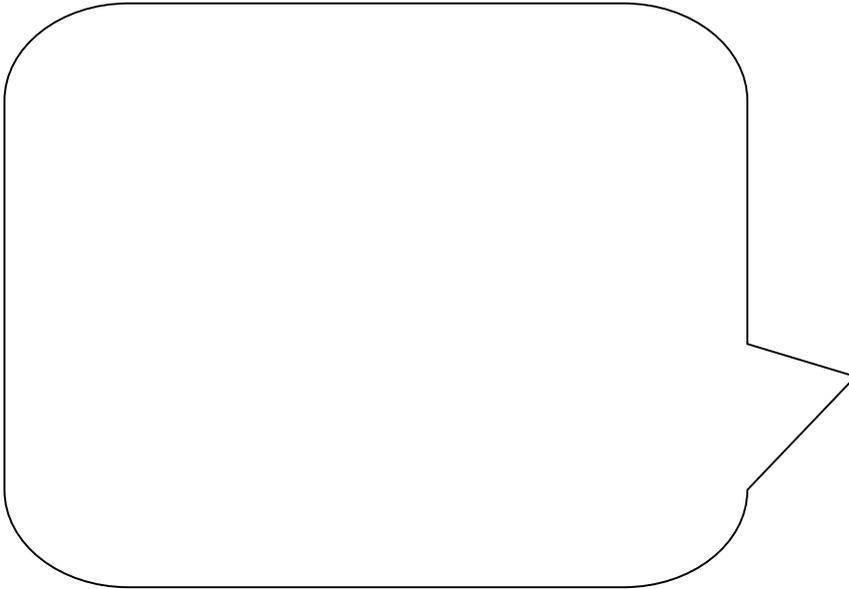
さらに、「敵がくれ」の写真や、宗箇がもっと自分らしさを磨こうと作った花入れや茶碗「さても」などの写真を提示し、現在においても大切に受け継がれていることを理解させる。

(キ) ワークシート

たけしちのちやじん うへだ ぞうじ
武野 宗人 上田 宗簡

年 組 ()

I、 「きつた。しれた。しなみか私らしむなれた。」といわんた宗簡は
しんなを氣持たたつたしもつ。



上田 宗簡の人物絵
© 山田 秀希 講談社

II、 今日の手廻の振り廻りをししもつ。

① 今日の手廻の時間は、たぬしなつたと思ひますか。

1. とも 2. まるまる 3. あり 4. せんせん

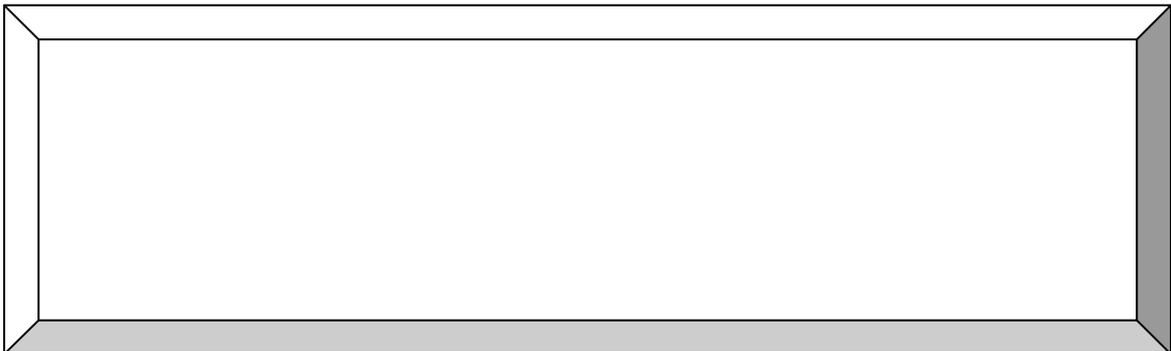
② あなたの意見を聞きながら、自分のしなを振り廻りましたか。

1. とも 2. まるまる 3. あり 4. せんせん

③ 半紙のみんなを意見を出し合ひ、添へましたか。

1. とも 2. まるまる 3. あり 4. せんせん

III、 今日の手廻の感想を書きししもつ。



(2) 活用のポイント

本資料は、戦国時代、広島に実在した武将茶人である上田宗箇について作成した資料である。上田宗箇流の茶道は、宗箇が自分らしい茶道の在り方を模索し続けたことによって現在まで受け継がれている。

本資料により、自分の長所や短所、自分らしい個性を発見するとともに、その個性を自分らしく発揮していこうという心情を育てていきたい。

児童は自分の個性や自分らしさということを日常生活の中でいつも考えているとは限らないため、学級活動など各教科等の中で「自分らしさ」や「個性」を発揮した場面などを意識させたりするなど事前・事後の取組が大変重要である。

ア 発問の工夫

人間としての弱さを吐露する宗箇を自分に引きつけて考えさせたい。そのために、まず、自分らしさがないことを、師匠である織部に指摘されてはっとする宗箇に視点をあて、なぜはっとしたのかということから、自分らしさについて意識したことのない宗箇について考えさせたい。そして、自分らしさを追究しようと焦る宗箇の深い悩みをとらえさせることにより、中心発問へと展開していきたい。

そして、自分らしさを発見できた宗箇の心情を考えた中心発問を「それだけではない」といってやさしさや思いやりなど自分のよさを伸ばそうとしていく宗箇の心情に気付かせていく発問構成とした。

イ 言語活動の工夫

話し合い活動においては、児童一人一人が自分なりの意見をもつように、独自のものができ上がり満足する宗箇の気持ちをワークシートに書かせ、時間をとってじっくりと考えさせたい。その後、隣の児童とペアトークをさせ意見交流をさせる。そしてクラストークへと発展させるようにしていく。さらにそれらを伸ばしていこうとする宗箇のその後の生き方を考えさせたい。

ウ 導入、終末の工夫

導入での長所の交流では学級活動での事前の学

習でアンケートをとったり、長所について話し合わせたりしておくなどして、導入がスムーズに行くよう心がけたい。自分の長所に気付かせそれをどのように伸ばしていきたいかを考えさせることで自分とかわらせていきたい。

その際、長所をクラスの友だちの前で発表し認めあえるような学級経営を日頃からの充実させておくことは言うまでもない。

終末では上田宗箇流 16 代家元の上田宗問氏のビデオレターを見せ、個性に気付き発揮することによって 400 年間、今も続いている上田宗箇流の長い武家茶道文化について理解を深めさせる。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

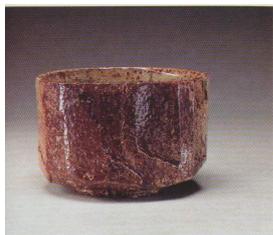
展開前段では、宗箇が織部から自分らしい茶道とは何かと問われ、「はっ」とし、何とか自分らしさを探そうとする宗箇の深い悩みをしっかりと考えさせておかなければならない。その際、発問は「自分流の茶道を求めているいろいろ試してもなかなか納得できない宗箇の気持ち」を問い、悩みの深さや焦りを出させておくようにする。

展開後段での中心場面では、戦いの最中でありながら自分らしい茶道について発見する宗箇の喜びを通して、自分の特徴を知ることの大切さに気付かせ、自分のよさを伸ばそうとする心情を育てようとしている。自分らしさがないという悩みの深さと、自分らしい茶杓ができあがった時の喜びや爽快さとの気持ちの違いをとらえさせねらいにせまる。

児童の反応は次のような意見が出された。

- ・戦いも忘れ茶杓を作ったのだから、できたときは晴れ晴れし、爽快感でいっぱいだろう。
- ・人まねではなく自分らしさが見つかったのだから興奮しただろうな。
- ・何をやっても人まねになり、焦っただろう。無心に削ることで自分らしさが見つけれられてうれしかったと思う。
- ・自分の生き方に合っている力強さが伝わってく

る茶道を見つけられてすがすがしい気持ちになったと思う。



さらに、できあがった喜びがあるのにもかかわらず「それだけではない」という宗箇のさらなる自分らしさの追究について問いかけ、もっと自分を伸ば

していきたいとする高い価値に深めさせる。

児童のワークシートには以下のような記述が多かった。

- ・宗箇が自分らしさを見つけ、さらに高めようとしたように、新たな自分らしさを見つけ高めていきたい。

自分を振り返る場面では、宗箇と自分を重ね合わせ、導入での長所の交流を通して、気持ちや思いを引き出し自分のこととしてとらえることができたものと思われる。

イ 言語活動の工夫

導入では価値への方向付けをするために、自分の長所を発表させた。児童はお互いの長所をよく知っており友だちの長所を認め合いながらあたたかい雰囲気で行うことができた。

話し合いにおいては、織部に自分らしさとは何かと指摘されたとき「はっ」とする宗箇の気持ちを自分も宗箇と同じような体験がないかを問い、自分と関連させながら発表させるようにした。

中心発問ではワークシートに書く活動をした上で自分の意見と友だちの意見を比べながらペアトークを行い、話し合い活動に入った。自分と同じ意見や意見を聞いてなるほどと思った事などを絡めながら発言することができた。

ウ 終末の工夫

終末では、上田宗箇 16 代家元の上田宗問氏からのビデオレターを見せ、宗箇の独自性があったからこそ、広島に根付き発展してきたことを理解させる。実際に 16 代目が自分たちへのメッセージを伝えてくれることで 400 年の歴史ある上田宗箇流の茶道が脈々と受け継がれていることを実感する

ことができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

総合単元的な道徳学習を展開することによって、有機的な関連としての効果が期待できる。

導入において価値への方向性をもたせるために、自分の長所を交流させるなどして雰囲気作りをしていく。

導入では、学級活動等の事前学習において自分の長所について考えさせるような活動を仕組むなどして、道徳の時間の導入がスムーズに行われるようにしておきたい。

また、資料の理解を図るために社会科での歴史学習を踏まえ、登場人物の人間関係を捉えさせておくことは必要なことである。また総合的な学習の時間での「日本文化再発見」で茶道の体験をさせておいたことは非常に効果的であった。その際、茶杓や茶碗など茶道具についても触れておき、茶道への関心と理解を持たせておいた上で、授業にはいることが重要である。また、5年生での体験活動で行った「宗箇山」への登山の様子を写真で提示し「宗箇」という名前を意識させた。



道徳の時間の中で体験を引き出すために、図画工作科等での作品作りや国語科での作文など、個性を引き出す学習に取り組んだことを伏線にして学習を展開できるようにし

たい。

(5) 心のノートを活用

「心のノート」P.32からは「自分を見つけみがきをかけよう」という項目になっている。よいところや自分を変えたいところなどを書き込むようになっている。事前に自分のよいところを探して書いておき、事後「自分向上プロジェクト」を作成するような取組が考えられる。キャリアノートとの関連を図ることも可能である。

教材活用例(5) 「一筋の光を求めて」

〔小学校高学年 主題：故郷の宝 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材「畝為吉」について〉

畝為吉は、安芸郡坂町の出身である。坂町に道路やトンネルをつくるために16歳でハワイに渡り努力の末、全私財を投じて遂に完成させることができた。

生涯を通して、郷土の発展を思い続けた先人の人柄や偉業に対して、現在でも地域行事として住民運動会が行われている。



明治22年 (1889年)	坂村に生まれる。
明治39年	ハワイに渡る。
大正15年 (1926年)	ハワイでマットレス工場を開始し、成功を収める。
昭和22年 (1947年)	トンネルの計画を息子らに明かす。
昭和24年	トンネル工事の起工式を行う。
昭和26年	トンネル工事が完了する。
昭和63年	99歳で大往生を遂げる。

畝為吉の経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、為吉の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	植田地区にある畑に行くのに、狭く険しい西嶽峠を登り下りしなければならなかった。重い荷物を背負っての峠道は、為吉や村人に苦勞を強いていた。	呉線の敷設工事で坂村にトンネルが開通したことにヒントを得て、トンネルをつくることを決意する。「自分の一生はこの山にありこの道にあり」と、単身ハワイに渡りさまざまな苦勞の末、工事の費用をつくることに成功した。	40数年間温めてきた計画を明らかにし、地区の代表者に協力を求めた。上条・植田両地区から総出でトンネルの工事を行い、為吉自身も自ら作業に加わり1年4ヶ月続いた工事が無事終了し、ついにトンネルは開通した。	地元の多くの人たちによって感謝の気持ちを込めた石碑が建てられた。今でも開通を記念して始められた住民運動会が行われている。トンネルの両端に「共存共栄」「協力一致」の言葉が刻まれ、為吉の人柄を今もしのばせる。

イ 資料の解説

【作成の要点】

郷土を愛する心を育てるには、児童の内面からの自覚が大切である。郷土の発展に尽くし伝統と文化を育てた先人の努力を知ることで、自分もそれを継承し発展させていくべき責務があることを自覚し、そのために努めようとする心構えを育てる必要がある。

中学年で社会科や総合的な学習の時間に、地域の様子や伝統文化について学んだことを生かし、高学年でそれをどんな人々がどんな思いをもって地域の発展のために尽力してきたかについて考えることにより、主体的に郷土を大切にしていこうとする気持ちが育まれると考えた。

畝為吉は子どものころの体験から自らのことのみならず、危険な峠道を通して畑に通う村人のことを何よりも気に掛けていた。トンネルをつくることを思いつき、単身でハワイに渡ったのも郷土の発展を願うただその一念に違いない。そこには、郷土に暮らす人々のために何かできないかと一心に思う郷土愛にあふれた人間性が見て取れる。他者を思うことでどんな逆境にも屈せず、信念を貫き通す人間の心の強さや尊さを本資料から読み取り、考えることを通して、自分の生活に生かそうとする心情を育てていきたいと考えた。



【心に響くちょっといいはなし】

少年の頃、大変な苦勞をして農作業に向かっていた経験が、その後の畝為吉の人生を決定づけた。ハワイに渡ったのも坂村の発展の為に道路を通したかったからである。トンネルを通したのはこの道の延長線上にあり、西嶽峠にしだけとうげを貫くトンネルを開通させたことで上条側と植田側の行き来が楽になった。

為吉はとにかく謙虚な人だった。トンネル工場の費用に全ての私財をなげうったことはいうまでもなく、トンネル工事が始まると、自分の畑で取れたスイカを村人にふるまったり、自らも工事に参加してスコップをふるったりして働いた。自らの偉業をひけらかすことも、銅像の話に耳を傾けることもなく、その意志は一貫して「ふるさとのため」「人々のために」と一度も揺らぐことはなかった。

ウ 資料全文

「一筋の光を求めて」

—畝 為吉物語—



渡航当時の畝為吉氏

今から約110年前。

14歳の為吉は、真夏の峠の急な坂道を登り、急しや面にへばりつく段々畑へと向かった。背負った重い荷物が肩にくいこむ。鼻が地面につくくらい体が曲がり、背中を起こすと後ろに倒れてしまうくらいの急な坂道だった。

「なんとかならんものかなあ・・・」

為吉が家の手伝いをするために通るには、あまりにつらい峠道だった。村人もまた、この峠で不便をしいられていた。

ある時、手伝いを終えた為吉が段々畑のあぜ道から、海岸沿いを通る呉線を眺めていたが、急に立

ち上がり水尻トンネルに目をやった。

「これだ。この山にトンネルを通そう。」

為吉の頬は夕日に照らされます赤くほてった。しかし、トンネルを掘るにはとてつもないお金がかかり、そう簡単に実現できることではなかった。

それから3年。16歳になった為吉は、当時の日本が外国移民のしょうれい⁽¹⁾を行っていたことを知り、(これはチャンスだ)と、両親の許しを得てハワイに行くことにした。もともと農作業には慣れてきた為吉ではあったが、常夏の島の広大なサトウキビ耕地で、朝から晩まで土を掘り、掘っては耕し掘っては耕し・・・毎日太陽に照らされ、常夏の島での重労働はなみたいていの苦労ではなかった。しかも一日の賃金がわずかで、

「いつまでもこんなことをしていたのでは、トンネル工事の費用など何百年先になることやら・・・トンネルづくりはやはり夢物語じゃっただろうか。」

と、たった一人途方に暮れたため息をもらした。

しかし、悩み続けたある日のことだった。段々畑に続くけわしい峠道を、息も絶え絶え歩いている村の人や、坂村に残してきたなつかしい両親の夢を見た。

「ここであきらめるわけにはいかない。」

目が覚めた為吉はこの日を境に人の十倍働いた。そして、人の十倍もの苦労もした。そのかいあって、ついにマットレス工場⁽²⁾をつくり成功をおさめてたくさんのお金をためることができた。それは、ハワイにわたって20年がかりのことだった。

それからさらに20数年後、為吉は日本にいる息子たちにこんな手紙を送った。

・・・実はわたしは、40 数年間、上条・植田間に道路やトンネルを通す夢をもっていた。もしも賛成してくれるなら、地区の代表者にそのことを相談し協力してもらえるよう頼んではくれないだろうか・・・。

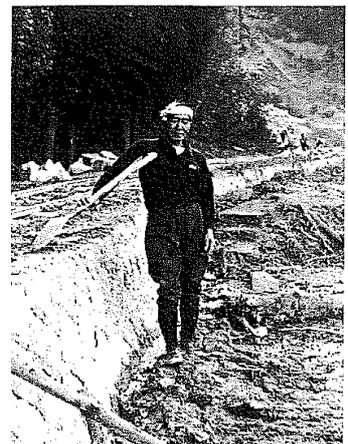
為吉がそんなことを考えていたことを初めて知った息子たちは、とまどいをかくせなかった。村人たちは始めは半信半疑だったが、為吉の熱い思いに応え地区の代表たちは何とか賛同してくれた。息子たちが早速そのことを知らせると、為吉は長年の夢が実現する喜びにふるえた。

ハワイでの最後の仕事を終わらせると、その2年後には坂村にもどり翌年から念願の工事が始まった。工事は上条・植田の両地区から三百軒余りの人々が総出で取りかかった。為吉も自らスコップをふるい作業現場で働いた。40年という長い年月を費やしてつくったお金は全て工事のために使った。それにもかかわらず為吉は人々に頭を下げて、

「ごくろうさんです。ようようしてくれんさった。」



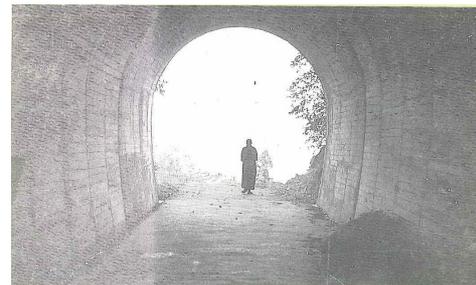
毎年行われている住民運動会



工事現場に立つ、為吉

と、やさしい目差しを向け人々にお礼を言って歩いた。さらに、子どもたちのためにと児童公園やプールもつくった。いつも周りの人々に気を使う為吉だった。こうして1年4ヶ月におよぶ工事が終わり、桜の花が咲き始めた暖かな春の日、ついに念願のトンネルは完成した。人々は手を取り合って喜びの声をあげ、歌に合わせて踊り祝った。

今ではトンネルの完成を記念して、毎年この公園で住民運動会が行われるようになった。
「畝のおじいちゃんがね、みんなのためにトンネルをつくっちゃったんだよ。」
あるお母さんが、運動会にはしゃぐ子どもたちに話して聞かせていた。
「坂町のために力を尽くした為吉さんの銅像を建てようじゃないか。どうかね為吉さん。」
そんな声も上がったが、
「わしは銅像など建ててほしゅうない。この仕事はみんながしたもんじゃ。これからもみんな仲良くすりゃあええ。」
と、為吉はその話を堅く断り続けた。ただ、トンネルの東側に「協力一致（きょうりょくいっち）」
西側に「共存共栄（きょうぞんきょうえい）」という文字を残すことだけ注文して・・・



上条側から見たトンネルの向こうに海が見える

【注】

- (1) 開国後の日本は、第二次世界大戦後に至るまで、労働力が過剰であったことから、外国へ移り住むことがすすめられていた。
- (2) ベッド用の敷ぶとんを生産する作業場のこと。

【参考文献】

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| 山根 富士夫 上条地区住民福祉協議会（平成 4 年） | 畝為吉翁の偉業-上条トンネルの話- |
| 新木 正司（昭和 60 年） | 坂町海外活躍史 |
| 坂町社会科副読本編集委員会（編集）（平成 14 年） | わたしたちの坂町 |

エ 授業展開例 - 学習指導案（略案） -

生涯変わりなく郷土を愛した為吉の心情を中心にした展開
～視聴覚機器を生かした指導～

- (ア) 主題名 郷土愛 4 - (7)
- (イ) ねらい 為吉がトンネルをつくろうと決心してハワイで苦労を重ねたことや、思うように資金がたまらず苦悩する姿を通して、郷土の発展のためにくじけず努力することの尊さを知り、40年あまり変わることのなかった気持ちに沿いながら郷土を愛する心情を養う。
- (ウ) 資料名 「一筋の光を求めて」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 坂町のよさについて話し合う。	○ 坂町の宝とは何でしょう。 ・曳船・横浜踊りなどの伝統文化がある。 ・古い歴史を大切にしている。 ・海や山の美しい自然がある。 ・人々が親切であたたかい。	○ 祭りや踊りの様子，山から見える海を写真で確認する。
展	2 資料前半を読んで話し合う。 ・ビデオ「昭和からの手紙」前半を視聴する。	○ 「これだ。」と思いついた時，為吉はどんなことを考えていたでしょう。 ・トンネルさえあればこんな苦労はしなくて済む。 ・村の人々のために自分ができることを見つけたぞ。 ・必ず峠にトンネルをつくるぞ。 ・トンネルさえあれば，村のみんなに楽をさせることができる。	○ 時代背景や当時の日本の様子について補足説明をする。 ○ ビデオ「昭和からの手紙」前半を視聴して資料の内容にせまらせる。 ○ トンネルをつくろうと決意した為吉の心情に共感させる。
開	3 資料後半を読んで話し合う。 ・ビデオ「昭和からの手紙」後半を視聴する。	◎ 目覚めた為吉が人の十倍働き，十倍苦労をしたのはどんな気持ちからでしょう。 ・ここでくじけるわけにはいかない。初心を忘れてはいけない。 ・せっかくハワイまで来て苦労してきたことを無駄にしたくない。 ・今でも坂村の人々は不便な道を通して苦労しているのかと思うと何とかしたい。 ・何年かかってもトンネルがつくれるだけのお金を稼がなくてはならない。 ・絶対にトンネルをつくるまでは日本に帰らない気持ちが強くなった。 ・どんなに苦しくても，あきらめるものか。 ○ 為吉はどんな気持ちでトンネルの完成を見ていたでしょうか。 ・これからもみんながいつまでも仲良く，協力し合って暮らしていってほしい。 ・みんなのために苦労してよかった。 ・これからも坂町が発展することを願っている。 ・今までがんばってきたことは間違っていなかった。	○ ワークシートの吹き出しに書くことによって，夢と希望を失いつつあったが，それでも諦めなかった為吉の気持ちを深く考えさせる。 ○ ビデオ「昭和からの手紙」後半を視聴して資料の内容にせまらせる。 ○ 為吉にとって，坂町の人々が一丸となってトンネルをつくったことが何より嬉しかったことに気付かせる。 ☆ 視聴覚機器の利用は，児童の理解を助け，郷土の先人の偉業とそこに至る心情を自分たちの生活に引きつけてとらえることができたか。
終末	4 授業の感想を書く。	○ 今日の授業の感想を書きましょう。 ・上条トンネルをつくるために地域の人がみんな協力していたんだな。 ・自分も坂町のためにできることはないかな。 ・坂町をもっと住みよい町にしていきたいと思った。	○ 為吉と自分を重ねて見つめさせる。

(カ) 板書例

一筋の光をもとめて
— 畝 為吉物語 —

畝 為吉
の 写真

- ・ 険しい峠道
- ・ 重い荷物を背負って
- ・ 「なんとかならんものかなあ。」

これだ

- ・ トンネルを通そう。
- ・ みんなが楽に仕事ができる。
- ・ 村人達に苦勞させたくない。
- ・ お金をつくろう。

ハワイへ ↓ もうだめかもしれない

人の十倍働き、十倍苦勞した

- ・ ここであきらめるわけにはいかない。
- ・ 村の人々に早く樂をさせたい。
- ・ 何のためにハワイまで来たんだ。
- ・ これまでの苦勞をむだにしたくはない。

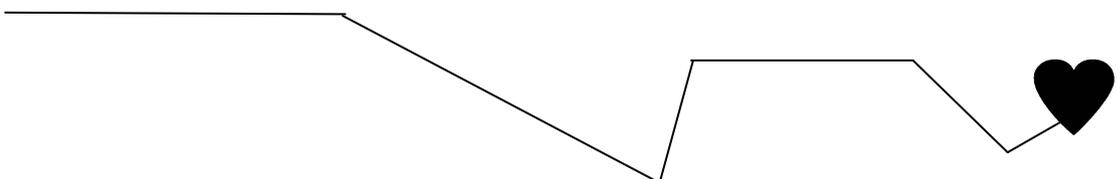
工事を終えて…

- ・ ようやくトンネルを通すことができた。
- ・ 村の人のためにあきらめないでよかった。
- ・ 長年の夢がかなって良かった。

トンネル
の 写真

共存共栄

協力一致



【板書の構成】

発問を短冊に書き内容の順に右手から提示する。中心発問は板書の中心におき、価値にせまらせたい。児童の発言はキーワードを残して書き、自分の考えと友達の考えを比べながら学習できる手立てとする。また、下段に心情曲線を用いて前段の為吉の心情の変化が目で見取れるようにする。

最後に「共存共栄」「協力一致」とトンネルの写真を貼付し、ねらいである「郷土を思う気持ち」を一層印象付ける。

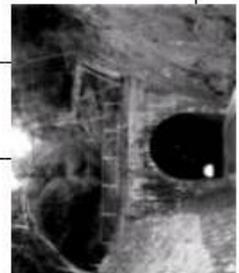
(キ) ワークシート

一筋の光をもとめて

年 ()

◎ 恭吉が人の十倍働き、十倍苦勞をしたのはどんな気持ちだったか
かきまわらうか。

◎ 今日の授業の感想を書きまわらう。



(2) 活用のポイント

本題材のねらいは郷土の発展の為に尽くした先人の努力を知り、郷土を愛する心情を養うである。ねらいを達成するために補助発問では、トンネルをつくろうと決意した為吉の心情について考えさせる。次に中心発問で主人公の心の葛藤に共感させた後、ワークシートを活用して考えを深める工夫をしたいと考えた。また、資料の歴史的背景や当時の人々の暮らしがわかるようにするため、視聴覚機器を活用し児童の思考を支援していきたいと考える。さらに中心発問や終末の場面で、自らの考えを深め整理することができるように、書く活動を取り入れる。

以上のポイントを踏まえ、本資料で児童が郷土に対する思いを深め、地域の発展のために努めようとする心構えを育てていきたい。

ア 発問の工夫

中心発問では、主人公が味わった挫折感や焦燥感を乗り越えて、仕事に打ち込むことにした点に着目させたり、補助発問として、主人公がこれからの町の発展を願う心情に迫らせ、価値の一般化につなげたい。

イ 視聴覚機器を生かした指導

100年以上前の歴史的背景や当時の人々の暮らしについてわかりにくい部分を補う効果があると考ええる。

ウ 書く活動の工夫

中心発問では、ワークシートを用いて書く活動を仕組み、児童がじっくりと自分の考えを出せるようにし、終末では感想を書かせ、価値の一般化を図るようにしたい。

(3) 授業の実際 —児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

発問は為吉の言葉や行動の裏側にある気持ちを問うことで、ねらいに迫らせたいと考えた。

導入では、坂町の宝について想起させて、伝統文化や自然などについて話し合うことによって、児童が本時の資料に関心をもち、終始郷土についての意識を共有化することができた。

中心発問では、「もうだめかもしれない。」とい

う挫折感に陥った為吉の気持ちに沿わせた後、そこから気持ちを切り替えた点に着目させた。その際、道徳的価値に対する弱さに触れさせるため、教師が揺さぶり発問をしたことにより、為吉の心の深い部分にまで掘り下げていくことができた。

イ 視聴覚機器を生かした指導

資料の文章からでは理解しにくい表現がいくつかある。しかし、100年前の時代背景や用具の名前などがビデオでは映像としてうまく表現されており、児童が関心をもって視聴することができた。また、児童は、村人が不便を強いられていた状況やトンネルをつくろうと思いついた経緯が把握しやすくなり、為吉の気持ちを考える上において効果的であった。

ウ 書く活動の工夫

葛藤を乗り越えた行動の裏にある気持ちをじっくりと考えさせるために、時間を十分確保しながら、ワークシートに考えを書かせた。書くことによって自分の考えを整理し、ワークシートを手がかりとして発言する児童が多かった。

【児童の感想から】

- ・坂道を上り下りする村人の苦労を忘れないで、みんなのためにがんばろうと思った。
- ・トンネルをつくるのが自分の夢でもあったし、両親や村人を助ける方法だったとあらためて思った。
- ・トンネルを通して「畑に行くことが楽になった。」と喜んでくれる顔が一日も早く見たい。
- ・ハワイに行くことを許してくれた両親のためにも、トンネルをつくらなくてはいけない。

等の考えが出てきた。児童の多くが、郷土のために尽くした主人公の心情をとらえることができていた。

また終末では、授業の感想を記入することで、児童が先人の偉業から学んだことをもとにして、自分も郷土のためにできることはないかと意識付けができた。

【児童の感想から】

- ・村人のために苦勞して働いた為吉さんはすごいと思う。坂町の誇りです。
- ・村の人々のためにここまでできるんだ。ぼくも坂町のために何かできることはないかと、考えていきたいです。
- ・坂町のために尽くしてがんばったんだなあと身にしみて思いました。
- ・40年以上かけて夢をかなえた為吉さんを見習って、わたしもがんばりたい。

○ 道徳コーナーへの掲示

校内に設置してある道徳コーナーに、道徳的な価値に関わる言葉とともに、「心のノート」PP. 104-105 の写真をカラー印刷したものを掲示して、いつでも全校児童の目に触れられるようにすることは効果的である。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

児童は3，4年生のときに社会科で地域の古い道具、文化財や年中行事、地域の発展に尽くした先人のことについてふれてきた。

4年生では社会科で「郷土を開く先人の働き」について学習をし、先人が郷土の発展に尽くした史実を調べた。そして、坂町発行の副読本「わたしたちの坂町」を活用して、ワークシートや新聞でまとめてきた。

また、総合的な学習の時間では、上条トンネルや為吉に関連する場所や、親族の方への聞き取りを行った。これらの学習を行った後、「青き一筋の光を求めて」という題で創作劇の台本を作成し、学習発表会で披露した。

このような学習内容を踏まえることによって、資料の内容への関心が一層高まっていく。

(5) 心のノートの活用

○ 道徳の時間

心のノート PP. 104-105 に「郷土や国を愛する心を」というページがある。

導入で「わたしのふるさとしょうかい」コーナーに記入をし、地域の良さにふれて学習に取り組もうとする意欲を高める手立てにすることもできる。

終末で掲載されている詩を読み、郷土を愛した先人の思いを振り返りながら、余韻をもって授業を終えるようにする。



教材活用例(6) 「夢とロマンを追い求めて ～彫刻家 圓鏝勝三～」

〔中学校第3学年 主題：理想の実現 内容項目：1の(4)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—圓鏝勝三—について〉

尾道市御調町出身の彫刻家。

自由な発想，イメージによる彫刻を制作・発表。野外彫刻にも意欲を燃やし，全国各地に記念像を制作している。日展特選4回，日本芸術院賞など受賞作品多数。日展顧問，日本芸術院会員，多摩美大名誉教授などを歴任，83歳のときに文化勲章を受賞した。

明治38年 (1905年)	現在の尾道市御調町に生まれる(勝二と命名)。
大正10年 (1921年)	河内小学校高等科を卒業する。 京都の彫刻師 石割秀光氏の内弟子となる。
昭和3年 (1928年)	上京し，日本美術学校に入学する。
昭和5年	第11回帝展に「星陽」を出品，初入選。
昭和21年	第2回日展に「砂浜」出品，特選。その後3回特選。
昭和35年	勝二を勝三と改名する。
昭和63年	文化勲章を受章する。
平成元年	広島県名誉県民となる。
平成5年	広島県御調町に圓鏝記念公園・記念館開館。
平成15年	逝去。

圓鏝勝三の経歴

(イ) 4コマ絵

圓鏝勝三の作品制作に対する考え方や生き方が表れ，人間的魅力が伝わるエピソードを中心に，4場面構成とした。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	「芸術の場合、『完成』などあって無きに等しい。『芸術』の道は遠いし，広く，無限である。～」という，芸術に対する圓鏝勝三の考えがよくあらわれている，自身の言葉を紹介。	圓鏝勝三は，美術学校の先生や周りの芸術家から，さまざまな素材で彫刻を制作する創作態度を揶揄されていた。にもかかわらず，信念をもって作品のイメージに最も適した素材を使って制作を続けた。	長い歴史をもつお寺から仁王像の制作を依頼された。既成のものにはこだわらず自分の発想を大事にしていく創作への姿勢と，重くのしかかる伝統とのほざまで，勝三は構想を練りに練り，他には例を見ない形の仁王像を完成させる。	母校の小学校の石碑に刻まれた勝三の言葉「積み重ね つみかさね ～」と，出身地である御調町に建っている圓鏝記念館の様子を紹介。

イ 資料の解説

【作成の要点】

自分の人生において、夢や理想をもって努力することが大事であり、すばらしいことであることは、誰もがわかっていることだろう。しかし、中学生ともなると、こうなりたい、こうありたいという夢や理想が、簡単に実現できるような易しいものではないことも認識されてくる。それ故その道のりの遠さに、「夢は夢。実現するのは難しい。」「夢はあるけど今はこんなもんでいいや。」とあきらめたり妥協したりして、毎日を送っていることもあると思われる。

本資料は、自分の表そうとする題材の精神を大切に、既成のものにとらわれず自由に表現したいという自分の理想とする創作態度を貫くために、信念をもって試練を乗り越え、日々精進を重ねていった彫刻家圓鏝勝三を描いている。数々の賞を受賞し、功績を認められているにもかかわらず、年を重ねてからもなお「積み重ね つみかさね 積み重ねた上にも又積みかさね」という座右の銘そのままの創作人生を送った彼の生き方から、理想の実現のためには、安易に妥協せず、今なすべきことを着実に取り組んでいくことが大切であることを改めて考えさせたい。



【心に響くちょっといいはなし】

- 勝三が小学生のときのこと。兄が部屋の片隅でうつむいて何やらしている。見ると、棕櫚（しゅろ）の枝でハンコ彫りをしているのだ。「おもしろそうだねえ。僕もやってみよう。」勝三（当時は勝二）は彫り上げたハンコを、夏休みの宿題の1ページに押し、提出した。すると、担任の先生が「見てごらん。圓鏝くんの彫り物は上手なこと。」とみんなに見せながら褒めてくれたのである。それまであまり先生に褒められることのなかった勝三は、それがうれしくてハンコ彫りに熱中するようになる。これが、彫刻を目指すきっかけであったように思うと、勝三は述懐している。
- 小学校の卒業を控え、美術品を手がける彫刻家になるための勉強がしたいと密かに思っていた勝三。しかし家業の農業を手伝ったり奉公に出て修業したりするのがあたり前だった当時の田舎にあって言い出すこともできないでいた。それでも父親の理解でやっと、仏壇の装飾や欄間などを手がける京都の彫刻師のもとに4年間内弟子として入ることが決まる。なかなかうまく彫ることができない勝三は、盆暮れの休みに故郷に帰る時間も惜しんで、京都でのみを手に一心に木に向かっていた。他の弟子と同じくらいの仕事ができるようになると、今度は他の人が5日で仕上げる仕事を、3日でできるようにしようとまた努力を重ねていくのだった。しだいにその腕を認められ兄弟子よりもたくさん稼げるくらいに仕事が入ってくるようになったのだが、彫刻家への夢をあきらめきれない勝三は、弟子入りから7年の後、頼る人もいない東京に一人向かったのである。

ウ 資料全文

「夢とロマンを追い求めて ～彫刻家 圓鏝勝三～」

「芸術の場合、『完成』などあって無きに等しい。『芸術』の道は遠いし、広く、無限である。ここが芸術の面白いところでもある。」

これは、多摩美術学校（現・多摩美術大学）の名誉教授となった圓鏝さんの、七十歳を越えた頃の言葉です。

圓鏝さんは若い頃から、作ろうとする作品によって、どの素材を使うかを決めました。当時は、多くの彫刻家たちがそれぞれに専門の素材を決めていて、専門の素材以外での作品づくりはするな、芸術は一筋道であるのがよいと言われていた時代でした。しかし、圓鏝さんは主流とする木彫以外にも、ブロンズ、セメント、樹脂、陶器など、さまざまな素材を使った作品作りや、ブロンズと金属、ブロンズとガラスといった材質の異なるものを組み合わせた作品づくりにも挑戦していきました。そんな作品づくりをする圓鏝さんに対して、まわりの人たちから「八百屋みたいだ。デパートみたいだ。」と揶揄^{やげう}されるなど、非難めいた言葉を言われることもありました。

しかし、圓鏝さんはそうした非難にも負けずに、信念をもって作品の創作を続けました。

昭和四十九年、東京にある池上本門寺いけがみほんもんじから山門（仁王門）に据える仁王像すの制作依頼の話がありました。仁王像とは、仁王立ちと言って、どちらから押しても引っ張っても動かない、両足を平行に踏ん張っていかにも強そうな形をしたもので、邪鬼を払い仏を守るために、寺の左右の門に一对で置かれます。圓鏝さんは、運慶・快慶による東大寺南大門の仁王像を初め、各地の仁王像を見学したり、さまざまな文献・資料を研究したりして、「仁王の姿はどうあるべきか」を自分なりに模索しました。

圓鏝さんが作品を作るときに一番大切にしたのは、その題材のもつ精神をどのように形に表すかということでした。基本的な約束事を大事にしながらも、既成のものにこだわらず、自分の発想や心を入れて創作していきたいという考えです。ですが、池上本門寺は、七百数十年前に日蓮聖人にちれんしょうにん（2）が入滅（臨終）された霊跡であるという長い歴史とさまざまな霊宝をもつ大本山（3）です。由緒ある寺の沿革からも、空襲で焼失する前にあった仁王像は、二千三百年も前に作られた歴史ある像であったことから、寺院側の伝統を重んじる気風が強く感じられました。圓鏝さんは、構想を練るときには何をしても頭から離れないくらい、くる日もくる日も悩み考える日を過ごしますが、このときはいつもにもましてそういう日が続きました。

構想を練りに練り、いくつもの下図を描いて形を作り、やっと十分の一の小品を作って、役員全員の納得と賛成を得ました。その後二分の一の原型を作り、依頼から四年後の昭和五十三年、七十三歳のときに、伝統を守りながらも、片方の膝を思い切り上げ、普通は背の後ろに下がっている天衣を頭上に舞い上がらせた従来の基本型とは違った全長三・六メートルの仁王像を完成させました。この躍動感あふれる仁王像は、「仏を守護する憤怒の像であることを本質としながらも、慈悲の心をも内にたたえているように見えてならない」歴史に残る傑作であると言われてています。

生涯彫刻作品を創作し続けた圓鏝さんでしたが、母校である河内小学校（現・尾道市立御調西小学校）の校庭の石碑には、晩年圓鏝さんが訪れたときの「積み重ね つみかさね 積み重ねた上にも又積みかさね」という言葉が刻まれています。圓鏝さんが大事にした言葉です。

平成五年には、出身の尾道市御調町に文化・芸術の発信源として圓鏝記念館が建てられました。京都での内弟子時代、わずかにもらう小遣いで見に行った帝展や院展⁽⁴⁾に出されている彫刻作品を前に、自分の思いが熱くなるのを感じていた圓鏝さんの意思を継ぐように、今も多くの人が訪れています。

【注】

- (1) からかうこと。
- (2) 日蓮宗の宗祖。
- (3) 総本山の下にあって、所属の末寺を総轄する寺のこと。
- (4) 帝国美術院展覧会と日本美術院展覧会の略。

【参考文献】

- 圓鏝勝三(1988) 「わが人生」 御調文学 No. 22
圓鏝勝三(1989) 「わが人生」 御調文学 No. 23
祖田浩一(1991) 「名誉県民小伝集 圓鏝勝三」 中国新聞社

エ 授業展開例 ー学習指導案(略案)ー

勝三の創作へのこだわりがわかる作品づくりを中心にした展開
～ 書く活動を通して自分を見つめることを大切にしたい指導 ～

- (ア) 主題名 理想の実現 1ー(4)
(イ) ねらい 「積み重ね つみかさね～」という言葉をお大事にした圓鏝勝三の彫刻に対する考え方や生き方を考えさせることにより、理想をもち、その実現に向け、一步一步着実に取り組もうとする心情を育てる。
(ウ) 資料名 「夢とロマンを追い求めて ～彫刻家 圓鏝勝三～」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導 入	1 圓鏝勝三について知る。	○ 二つの仁王像の写真を見比べ、どこが違うか言ってみよう。 ・足を大きく踏み出している。 ・ひも状のものが上がっている。	○ 大きな違いを見る。 ○ 動きの大きい方の仁王像の制作者圓鏝勝三について説明する。
展 開	2 資料を読んで、圓鏝勝三の創作に対する思いをとらえる。	○ 非難されながらも、圓鏝はなぜいろいろな素材を使っただけの作品作りを続けたのだろう。 ・いろいろな素材に挑戦したいから。 ・勉強になるから。 ・いろいろな素材を使うことで、自分が表現しようとする作品を作ることが可能になるから。 ○ 圓鏝は仁王像を制作するとき、なぜいつもにもまして悩んだのだろう。 ・仁王像とはどういうものを自分なりにしっかりとつかんで表現しようと思ったから。 ・伝統や基本を大事にしなければならないから。 ・許される範囲で自分がイメージする仁王像を作りたかったから。 ◎ 「積み重ね つみかさね 積み重ねた上にも 又積みかさね」という言葉を大事にした圓鏝さんは、彫刻の仕事を続ける上でどんなことを心がけていたのだろう。 ・自分のめざすことを成し遂げるために、日頃の努力を惜しまないこと。 ・自分の納得のいく作品作りのためには、日々の一生懸命な取り組みを続けなければいけないこと。 ・今あるものや今の自分の力量に満足せずに、もっと上を目指して努力を重ねていくことが大切であること。	○ 教師による範読。 ○ 自分の信念を貫き通す圓鏝には、周りからは非難めいた目が向けられたことを確認して次の発問に移る。 ○ ワークシートに記入する。 ○ 自分の創作へのこだわりと伝統との間で、より納得のいく作品作りに挑んだ圓鏝さんの苦悩をとらえさせる。 ○ 圓鏝が現状に満足せずに、常に理想の実現に向け努力し続けていることに気付かせる。
	3 学習のまとめとして、自分の生き方と重ねて考える。	○ 圓鏝の生き方に触れ、今の自分を振り返って考えたことを書いてみよう。	☆ 圓鏝の生き方と今の自分の生き方を重ねて考えることができたか。
終 末	4 圓鏝勝三の作品の写真を見る。	○ 圓鏝の作品を見てみよう。	○ 生きているものへの愛情や平和への思いが伝わる、また夢を感じさせる作品を紹介する。

(力) 板書例

「積み重ね」の書
写真

- ・日頃の努力を惜しまないこと
- ・自分の納得のいく作品を作るためには、一生懸命取り組みを続けることが大事であること
- ・自分の今の力量に満足しないで、もっと上を目指して努力を重ねていくこと

圓鏢さんは彫刻を続ける上でどんなことを心がけていたのだろうか

- ・仁王像とはどういうものかをつかむため
- ・伝統や基本を大事にしなければなら
ないから
- ・許される範囲で既成のものではない、
自分のイメージする作品を作りたいから

本門寺仁王像
写真

↓

高い評価

なぜ仁王像制作のとき、いつもにもまして悩んだのだろうか

- ・挑戦したいから
- ・自分の勉強になるから
- ・自分が作ろうとする作品により近いものを
作りたいから

↓

周りからは
非難
めいた
言葉

夢とロマンを追い求めて 彫刻家 圓鏢勝三

圓鏢勝三
写真

尾道市御調町出身
文化勲章受章

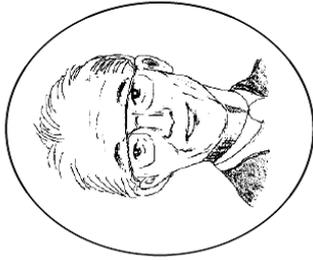
【板書の構成】

芸術家や芸術作品を扱った教材なので、生徒にはイメージしにくいと思われる。圓鏢さんの写真や作品の写真（絵）などを使って、視覚でとらえることで少しでも考えやすいように工夫した。

信念を貫こうとする圓鏢の行動は、周りから冷たい反応があったり、本人自身が相当悩んだりしたにもかかわらず、結果としてうまく物事が進んでいるので、その過程におけるたいへんさを軽く考えてしまいがちである。しかし自分の信念を曲げずにやり通したところに目を向けることがこの授業では求められる。一つ目の発問での生徒の反応を板書した後で、この創作態度に「周りから非難めいた言葉」があったことを確認し書き加えることで、仁王像制作にかかわって圓鏢が自分の信念と伝統との間で、構想を練り上げるまでの苦悩をとらえやすくなるだろうと考えた。また仁王像の写真（絵）の下には、生徒の反応を板書した後で「高い評価」と書き加えることで、圓鏢が信念を曲げずに努力し続け、その結果みんなに認められるようになったことを印象づけるよう心がけた。

(キ) ワークシート

「藝文ロマンを追いかけて ～彫刻家 圓鋸勝二～」



三年()組 名前()

Ⅰ 圓鋸さんは土王像を制作するけれど、なまじつわじわあつし
悩んだのだらう。

Ⅱ 「積み重ね つみかたね 積み重ねた上じも又積みかたね」という言葉を大書にした
圓鋸さんは、彫刻の仕事が続くことで、まんじつをながらしたのだらう。

Ⅲ 圓鋸さんのまきだに触れ、進路決定を控えている今の自分を振り返って書きたことを
書いてみよう。

(2) 活用のポイント

圓鏢勝三は、自分の目指す創作への姿勢を貫き、理想の実現に向け、常に前向きにたゆみない努力を重ねていった。彫刻家として成功を収めた人物である。しかし、まだ封建的で保守的な考えも強かった当時の芸術界にあって、信念を貫くことはそう簡単ではなかったと思われる。

そこで、厳しい状況の中にあつてさまざまな素材を使つての作品作りを続けたところや、伝統を守ることと自分の発想を取り入れることの狭間で悩んだ仁王像の制作についての場面を資料に取り入れた。そして、常に向上心をもって努力を重ねていくことを大事にしていたことがわかる言葉も入れ、その生き方にふれることで生徒が自分を振り返り、これからの一日一日の過ごし方を考えていくことをねらっている。

指導に当たっては、作品の写真なども提示・紹介し、圓鏢の業績を考える助けとし、また平和への思いや夢とロマンを生涯大切にした圓鏢の生き方も合わせて知らせたい。

ア 発問の工夫

圓鏢が創作態度を貫いたところと悩んだところを基本発問にし、中心発問では、彼の母校である市内の小学校の石碑に刻まれている座右の銘として常に心していた言葉から、圓鏢の生き方に迫らせる。

イ 書く活動を取り入れた工夫

生涯、理想の実現のための努力を惜しまなかった圓鏢の生き方に触れさせた後、生徒に今の自分を冷静に振り返り今後につなげていくために書く活動を取り入れる。

ウ 作品の写真(絵)を見てイメージしやすくする工夫

導入で関心をもたせることも含め、二つの仁王像を見比べさせることにする。

終末においては、県内の公園に設置されている平和を願った像や家族をモデルにした作品、メルヘンチックな作品など幅広く紹介する。



「花の精」

(3) 授業の実際 ー児童生徒の反応を踏まえてー

ア 発問の工夫

基本発問では、圓鏢の自分の制作への熱い思いやこだわり、そして伝統も重んじなければというプレッシャーの中でも自分の創作の姿勢を大事にしたことが出てきた。

中心発問でも、「一つのものを作るのに、自分らしさを大切に、新しい表現や技法をできるだけ取り入れ、よりよいものを作ろうという気持ちを忘れないこと」「自分の限界を決めず、努力と経験を無限に積みかさねていき、満足のいく結果を残すこと」など、圓鏢の生き方に迫ることができた。

イ 書く活動を取り入れた工夫

学習のまとめとして書く活動を取り入れた。生徒は中学校第3学年の時期ということもあり、理想をもち、その実現に向け、一步一步着実に取り組んでいった圓鏢の生き方と今の自分の生き方(進路を含め)を重ねて、ねらいとする道徳的価値とのかかわりで深く自己を見つめていくことができた。

【ワークシートの記述から】

- ・「常に今より上を求めて自分を高めていく圓鏢さんはすごいと思う。私も自分ですぐに限界を決めたりしないで、『努力』を忘れず、『進化』していけるような人になりたい。」
- ・「天狗にはならない。限界をつくらない。ずっと努力を続ける。今の自分は残念だけどどれもできていない。少しずつでもそれができる自分にしていきたい。」
- ・「自分の進路の実現に向け、口で言うばかりではなく、しんどくても確実に行動に移していくこと、それを続けていくことが必要だと改めて思った。」
- ・「今までさぼっていた分、この2か月間1年生で習ったところから見直して必死で勉強した。わからなかったところが少しずつわかるようになって、積み重ねていくことは大事だと思った。」

ウ 作品の写真（絵）を見てイメージしやすくする工夫

導入において、作品に関心をもたせ、圓鏝の紹介につなげるために2種類の仁王像を見せた。違いはすぐにあげられたが、圓鏝が制作した仁王像の特徴をより意識させるために、3～4種類くらいの像を短時間見せてもよい。

終末においての作品の紹介は、平和への願いをこめた「平和祈念像」（広島平和公園）や「朝」（広島駅北口）、家庭的な雰囲気「初夏」「新聞」、仁王像と同時期に制作したユーモラスな「夢・夢・夢」、メルヘンチックな「北きつね物語より」など、素材だけでなくイメージも違う作品を見せると、先に仁王像を見せているだけに圓鏝の創作の幅の広さがより印象的に伝わるものと思われる。また県内各地にも作品が設置されているので、授業に際して写真等により提示することで、より身近に感じられると思われる。

（4）各教科等（体験活動を含む）との関連

総合的な学習の時間や学級活動などでの進路学習やキャリア学習との関連が考えられる。

圓鏝が彫刻家を目指したきっかけが小学生のときの小さなできごとであったこと、16歳で内弟子に入ったのは自分の希望通りの道ではなかったが、そこで努力を重ね、力をつけたことが次につながっていることなど、夢の実現には、今自分のおかれているところで精一杯の努力を続けることが大切であることを考えさせることができる。

（5）心のノートの活用

授業の導入または終末において、「心のノート」のP.32「夢や理想をもち それに向かって一步一步進んでいく姿は たのもしいもの」、終末においてP.33「あなたの夢や理想を実現するために いま、どうすることが大切なんだろう」のページが活用できる。

